

ア。」新造「扱もがをれ其の譯を、お前如何して知つて居なんすえ。」宮城野「サアそれは、オ、毎度私が所へ旅人の客衆がお出でなんしたから、それでよう覚えて居るわいな。イヤ客衆で思ひ出した、奥の客衆も待ちかねである、私も今行く程にな、お前方皆様連れてよいやうに。コレしけりも中の町の井筒屋へいて、孫治様に昨日の返事は来たか聞いて来や。此の子は私が用がある、皆様早う。」と姉女郎の、詞に面々立ち上り、「眞に勤めと云ふものは、何國の人にも逢はねばならぬ、宮城野様のお話で、此の子の話が解りんした。私らとても外ではない、だ、アやがアまの爲に賣られて、此の勤めをするからは、客衆と寝そべる度ごとに、赤はられたれて氣に入つて、小遣もらを。」と口々に、奥座敷へと急ぎ行く。あと打詠め宮城野は、おのぶが傍へ差し寄つて、宮城野「コレ其の子や、さつきからの話には、姉を尋ねて此の里へ来たと言やるが、マア其方の國は奥州で、何と云ふ所ぢやぞいの。」おのぶ「オオ私らは奥州白坂の在、逆井村といふ所。」と、聞くに始めて宮城野が、胸にぎつくり、傍を見廻し、宮城野「ムウそんなら其方のと、様の名は、與茂作様と言やせぬか。」おのぶ「それを知り召すそれ様は、姉サアでござるか。」と、飛び立ちながら、おのぶ「イヤ／＼／＼、母の常に云はしやるには、姉サアの方にも印がある、それを互に合はせたうへ、志もうち明けろと云ひ召した、印があらば早う見せて呉んされなう。」宮城野「オ、常々大事にかけて置く、その證據見せうぞや。」と、立つもいそ／＼そこそ

ここに、簞笥の上に硯箱、夏書の帳に書きかけの、文も心は通ふ神、淺草寺の観音の、扉表具にお備へも、上は鼠が引出を、開けて中より取り出す、守袋を見るよりも、此方も首にかけまくも思ふ壺井の御守、おのぶ「コレ／＼／＼、國を出る時母様が大事にせいと下さんした、ア、河内國壺井とやらの御守。」宮城野「オ、父様は楠家の御浪人、扱は其方が妹であつたか。」おのぶ「姉サアでござるか。」「オ、嬉しや。」と絶り付き、外に詞も泣く許り。折節亭主惣六が、奥座敷へ宮城野が、出ぬはいかにと座敷の口、覗けば内に泣き入る二人、仔細あらんと暖簾の陰、身を潜めてぞ伺ひる。背撫で擦り宮城野は、顔つれ／＼と打守り、「オ、妹よう尋ねて来て給つたなう。年端の行かぬ其方、よもや一人來はしやるまい。父様か母様が付いてお出でなかつたか、もし道ではぐれでもしやつたか、サちやつと云うて聞かshやいの。」と、言へば妹はしやくり上げ、はつと許りになき沈む。宮城野「コレ／＼／＼斯う廻り逢ふ上は、悲しい事は何も無い、泣いては濟まぬ、サ何とぢやいの。」と、問はれて妹はなほ涙。おのぶ「コレエ父は五月田植の時、代官の志賀臺七と云ふ悪でてな侍に、切られてお死にやり申したわいの。」宮城野「ヤア／＼／＼、そりやまあどうして／＼。」問ふも／＼狂氣の如く、おのぶ「アコレコレコレ、其の様におもしろやると、胸先が突張り申して、一つも口へ出申さぬ。マダ悲しいことがござるチャアござるチャア。私も既に殺さる、所、莊屋の伯父御が驅け付けて、力んで見ても何のまあ、

正銘證據が御座ないから、屹と敵と云ふ事もならず、父は犬死。語るも長い事なれど、そなたの云號の御亭にも尋ね逢ひ、此の江戸サアへ歸り申した。跡は私と母ばかり、便りない身に下地の大病、重り重りて母は六月の十六日、悲しや終に死なしやり申したワイナウ。」宮城野「ヤア。」おのぶ「オ、悲しいは道理でござるチャア。」跡に残る私獨り、何條にも彼條にも仕様はなく、莊屋の伯父御が引取つて、福島町へ出はつて、奉公しろと云ひ申す。何の奉公所かい、口惜しいと悔しいでござ腹はやめ申す。それからそこを驅落して、それ様が懐かしさ、坂東順禮すると云うたら、お寺で笈摺拵へてくれ、段々尋ねてくる道筋、慈悲せごんのある人は、飯喰はせたり手の内くれ、脊戸の木部屋に泊めて貰ひ、または邪見の人の家、軒下に寝そべつても、邪魔な餓鬼子とてへんさ打たれ、なづきのするをこたへく、ほんにてきない思ひをして、尋ねて昨日淺草の、お觀音の引合はせと、守に入れし戒名の道引で、廻り逢うたも血筋の縁、コレ便りになつてくれもしや。」と、歎きに交る國詞、涙になまりはなかりけり。宮城野始終聞く中にも、悲しさつらさ身も世もあられず、急き来る涙おし下けて、宮城野「コレ、妹、定めし常々母様のお話にも聞きやらうが、慥か其方が五つの年、父様は水牢とやらのお咎め、其の御難儀を救はん爲、母様と談合の上、八年以前に此の身を賣つて人手に渡り、遙々ここに流れの身。ア、思へばく世の中に、私ほど因果な者はない。遠國隔てて此の里へ、來たは丁度

十二の年、父様や母様のお顔も覚えて居るけれど、外に兄弟とてもなう、そなた一人を便りぞと、案じぬ日とは、ないわいなう。客衆を送る後朝に、東雲つぐる烏鳴き、悪いとどうやら氣に懸り、お二人ともに御無事なか、妹はまめで大きくなり、お傍にゐるが羨ましや、辛い苦界の其の中に、傍輩衆の母様が、訪ひ音信の度々に、悲しい話聞かせたり、又仕合のよい時は、嬉しさうな顔をして、モウ何年で年が明け、内へ去んだら誰様と、女夫となつて如何してと、身仕舞部屋の咄をば、聞くほど胸に一杯の、涙は落ちて白粉の、融いて化粧で隠せども、向ふ鏡に僞りの、なきて苦界の我が身の上、巡る紋日も松の内、桃の節句に菖蒲茸く、軒の燈籠二度の月、菊の節句や俄の時、仲の町に出て居ても、若し父様に似た人の、ありと思へば心付け、又は莊郭の勤めには、田舎ぞめきの見物が、覗く店先格子先、見るのも若しや父様が、尋ねて逢ひにござんしても、それぞと知る種にもと、思つて暮せばあじやらにも、浮氣心は夢にさへ、結びし帯の解きもせず、云號ある此の身にて、辛いせつない、エ、はづかしい。悲しい勤めも親の爲、何卒早う身儘になり、父様や母様と、一所に暮して如何してと、それ許りを樂しみに、月日を數へ指を折り、待ち暮したる甲斐もなう、思ひがけない父様は人手にかゝつてはかない御最期、又其の上にも母様にも長い別れになつたとは、マどうした薄い親子の縁。親を大事にする者は天道様の恵みがあると、云ふのも誑ちや僞りぢや、頼みをかけし稻荷様觀

音様も聞えませぬ。」と、愚癡に差込む癩癩も涙に洗ふごとくにて、身も浮くばかり泣きければ、妹も共に正體なく、おのぶ「コレく姉サア、便りと思ふ其方が其の様に泣かしやつて、俺は何となるものぞ、よいしやんしてくれもしや。」と、縋り歎けば、宮城野「オ、いとしやなう、海山越えて遙々と、尋ね逢うたる此の姉は、あるに甲斐なき勤めの身、そのみならず此の私を、尋ねん許りに和女まで、又此の里へ身を賣るとは、何の因果か情なや。」と、姉妹手に手を取りかはし、あやも歎きの有様は、秋の最中の月星に、雨雲かゝりし如くにて、涙の時雨ぞ哀れなり。歎きの内に宮城野は、氣をとり直し泣く目を拂ひ、宮城野「コレ妹最前其方の話の中、云號の夫も江戸へとやら、其のお人の名所は。」おのぶ「イヤ名も所も知り申さぬ。」宮城野「シテ敵臺七とやらの顔は。」おのぶ「ア、よう覚えて申す。目まなこの大きい鼻の平たい男サ。」宮城野「モウ宜い云やんな壁に耳、父様は武士の果て。」おのぶ「スリヤ其方や俺も侍の種だから、一時も早う敵が討ちたうござるわいの。」宮城野「オ、よう云やつた、でかしやつた。コレ親の敵は俱に天を戴かぬとやら、幸ひ奥の大一座、騒ぎの紛れ此の里を、脱落するより外はない。何彼の事は一時も、早う立ち退き田圃の方、私についてサア來や。」と抱へ引締め身繕ひ、立ち出でんとする所へ、惣六「宮城野何處へ。」と主惣六、宮城野「エ旦那様何時の間に。」と惚りは、隠せど聲に知られけり。惣六「イヤ俺は唯今、惚りせいでもよいことを。コレ宮城野、マ下に居や、其方は

アノ敵、エ、イヤサ堅き約束した男がある故に、郭を脱落。ハテさうであらうく、悪いぞや。また其の子は其方知つてゐるか。」宮城野「アイ、イ、エ、アノ先に新造衆が昨日から來たと云うて、連れて來てぢやによつて、餘り不便さ。」惣六「それで呼んでおきやるか、是れも尤も、サア二人ともに用がある、ちよつとマ、爰へ。」と、云はれて何と爲方も、流石ちひさき女の魂、「旦那様赦して下さい。」と、突きかくる刃物搔潛り、側に有りあふ鏡臺の、鏡おつ取り打ち落し、惣六「コリヤ早まるな急ぐ所でない程に、心を急かすとマ、俺が云ふ事を、サア熟りと聞きやいなう。コレ姉妹エ、アイヤサ是れは鏡臺、鏡にうつる二人が顔、似たりやく杜若花菖蒲、其の五月雨のくらき夜に、敵を討つたは曾我兄弟、ハ、ハアコリヤ假名本の曾我物語第四の卷、幸ひ俺が讀んで聞かそ。光陰惜しむべし時人を待たざる理、隙行く駒、繋がぬ月日重なつて、一萬は十三歳になりけり。身の不肖なるに付けても、また公方を憚る事なれば、竊かに元服して繼父の苗字を取り、曾我十郎祐成と名乗りけり。コリヤ十郎元服の事、又此の末箱王は母の教へに箱根へ登らせしを下參して、北條殿と云ふ烏帽子親を取り、曾我五郎時宗と名乗り、マかう云うては味いな所へ曾我物語、一つも合點は行くまいが、よう推量して見や。河津殿の種でさへ親の無い身はあれ是れと、繼親の、イヤ烏帽子親のと頼む、サ其の中の憂き艱難、モ我一存ではいかぬぞや。其方が若しこゝを脱落して、敵、ヤサ其

の堅き男を尋ねても、いはば女の身の上、確乎とした北條殿と云ふ様な後立がなければ、中々思ひは晴らされぬ。其の中には悪い魔がさして、むざ／＼月日を送る事もあるものぢや。ハテ曾我殿原でさへ、大磯化粧坂の傾城に心を奪はれ色々の貧苦、ハテコリヤモ芝居でもようする事ぢや。又縦ひ此の郭を逃げ果せてからが、遠國生まれの其方が事、當分先の的も無う、うろ／＼するのを内外の者が見付け、イヤ／＼どこそこ居ますと云ふを聞いて、打捨つて置くとは主の身ではどうも云はれぬ。ハテ其方許りが親に孝行ではない、勤めをする者に、親に孝行でない者は一人もないわい。それぢやによつてあれも孝行ぢや、是れも孝行ぢやと其の儘で置けば、俺も女郎屋をやめねばならぬ。コリヤ浮世の身過世過。また面々の内の倅が女郎買に行くに聞けば、ヤイ爰な癡愚者めが、勘當するぞと呵り付け、人の子の道樂者が來ると、爲になる客人者ぞ、随分と大事にしやと女郎どもにも云ひ付ける。マ此の様な得手勝手な商賣はして居れど、慈悲と情と云ふ事は心に不斷忘れはせぬ。不思議に昨日淺草で、廻り逢うた奥州者、姉を尋ねる許りに此の身を賣るとの志、直に女衞に金渡し、連れて來たのも其方の身の上、國に妹があるとのこと、若しやと思つた甲斐あつて、二人寄つて最前から何やら話す。扱こそと煙草呑みながら、隣の部屋で聞いてるれば、切ない哀れな咄を聞き、悲しうて涙が溢れ、手に持つてゐる煙管の鴈首上りをうち忘れ、火皿で口を火傷したわいなう。元より浮氣な

事もなく、勤め大事にして呉れた其方の事、何の悪う思はうぞ。まして何にも知らぬ女の身、今突きかけた此の刺小刀、俺にさへ打ち落さる、位で、如何して相手は武士ぢやないか。若し返討ち、サ内へ歸つても手前が恥になる。それぢやによつて云號の夫が北條殿と云ふ様な後立になる人が出來た時は、ハテ惣六は男ぢや、證文の金高は表向無代でもやるわい、必ず儕を笑はさぬ様にしてくれよ。モ芝居の積物や俄の世話もせぬ法もある、眞實誓文陸ではない。五つや三つの頃よりも曾我兄弟は心懸け、十八年の苦勞辛苦。それ程には待たずとも、アレ天道の恵みがあらば、今にでもよい幸ひがある物ぢや、コレ身の上大事に時節を待ちや。」と曾我に比へて姉妹に、道を教へる通り者、宮城野はなほ嘯り上げ、宮城野「常からお氣質知りながら、親の別れに氣も亂れ、手向ひ致した私を、憎いとも仰有らず、却つてお慈悲の御詞、有り難しとも忝しとも、冥加の程が恐ろしい。」と妹も共に手を合はせ、只伏し拜む嬉し泣き。惣六「ア、コレ／＼／＼其の禮に及ばぬわい、モ聞き分けてさへ呉れれば、俺も嬉しい／＼。」と、義理を立て貫く男の惣六、隠せど袖に隠されぬ、胸にあまりし哀れには、通も不通も涙なり。奥座敷より遣手のまさ、まさ「サア申し宮城野さん、先にかから客人もお待ちかね、コリヤ誰だと思や旦那様、ヤ新參の在郷そこに居すと下へ行きや。」惣六「アイヤあれが事も宮城野に、内なと遣つて貰をと、それを今頼みに來た。コレ宮城野、随分今のことを、ナ合點がいたか。」まさ「オ、

それなればよい、サア／＼早う來や。」宮城野「アイ一寸顔を直して。」惣六「オ、イヤ素顔でも随分美しい。」と、譽めるも最良賣物に、花も實もある亭主が詞、アイと返事も泡沫の、淀む隙なく行く水の、流れは絶えぬ勤めの身、妹を爰に奥座敷、引別れてぞ、三重 新造、伊平治「狐を釣らう、狐を浮かせ、狐を釣らう。」五町「取つて見せうぞ。」新造、伊平治「狐を釣らう／＼、サア／＼釣つたぞ／＼、サ、五町香め呑め。」五町「南無三、ばかす／＼と思つたら、ツイ釣られた。ヤ釣られたで思ひ出した、此の宮城野様は遅い事、モシ新造様方へ、早う呼び申してお出でなんし。」新造「アイ／＼モウ今來なんす、それ其處へ。」と、いふ間もなく、古の歌に讀みしも哀れなり、宮城が原の旅寝かな片敷く袖に鶉なく、涙隠して、宮城野「オ、五町様、皆様ようお出で。」と、座に直る。五町「イヤようお出でなんした所か、先にお前をまつ太夫様、サテ旦那、此の大入杯で一つお始め。」黒右衛門「イヤ先づ貴方から。」秋夜「イヤ／＼此の秋夜より其許さまが、カノ宮城野殿をお待ちかね。初對面の杯。」伊平治「ヤア是れはきつい通り者、此の伊平治が仲人で、御祝言の杯は、是れ三々九度の黒右衛門殿サアおあがりなされませ。サテ花魁、是れは私がお取持、ドレ／＼御酌致しませう。」宮城野「オ、伊平治様、つぎなんすな拜みんすにえ。」伊平治「何、拜みんすの谷渡り、向うへ渡つて秋夜様、此の杯は貴方から、一つ飲つて誰様へでも、ヤア宮里様にかえ。よし／＼、先づ是れでお杯もすみ町の親方の

所なれば、女郎様方の御器量も日本一の君。」新造「コレたんとは云はれぬぞ、モシあのおかめの面は此の頃方々に懸けてござりますが、何の爲でござります。」宮城野「アノお徳女の面の事かえ、あれを懸けて置くと仕合が能いとの事、それでかけて置きなんすわいなア。」新造「ア、仕合とは有り難いナウ五町、是れも狂言の筋になりさうな物かい。」五町「なるとも／＼、此の頃揚屋町のせうか様が付けた通人舞、新造様方弾いておくれ。今こゝで神降し、末社と云ふも我々が名、牽頭といふも一つにて、コレ此の面を斯う被り、あれに坐す新造の、上著を暫しかりに著て、既に拍子を初めけり。歌通人舞を見さいな、大通人の客撰共には、いつも郭へ通ふ神、文の文魚も走り出で、男の喜十立ちぬいて、もの雄跡の鯉藤さい、よいきせきではないかいな。首尾を占ふ六川の、龜も八龜も文洲に、來之あれは幸先も、よしやなりよし振も吉原、漁長十橋森羅牧十、渭州左達に秀民眉月照りさふ里の夕映、祇蘭秀でて菊も香ばし、阿能待美や江戸の幸、墨河安穩千局萬川、歌の嘯柯も勇ましや。幫間末社のかみも賑し、只今奏づる舞樂清く、袖をひたして面白や、大通舞を見さいな。」宮城野新造「やんや／＼、きつい物だ／＼。」五町「イヤ牽強のあてぶりどう御座りますか。」秋夜「イヤ面白い事で有つた、それ一つ呑め。」五町「マアコリヤ山吹色有り難い／＼。」と、いふに鶉羽も負けぬ顔、小判取り出し扇の上、黒右「ソレ伊平治、皆の者にとらせい／＼。」伊平治「ハイ／＼、サア／＼時ならぬ惣花ぢや／＼、皆々寄

つて戴けく。「是れはく」と許り花を吉野屋が、面々に配分し、扇を眺めて、吉野屋「ハア何か書いてある、秋夜様、コリヤ何と云ふ事で御座ります。」秋夜「ム、みさむらひ御笠と申せ宮城野の木の下露は雨にまされり、コリヤ唐崎と書いて有る。」宮城野「そんならお前は唐崎様のお客様かえ、夫れなれば彼方へお知らせ申しんしよ、定めて主が今宵は悪うござんすによつて、夫れで私を名代の心かえ、しみくお有り難うござんすにえ。」黒右「是れはく迷惑千萬、此の扇はちと譯ある事。」宮城野「サア其の譯のあるお方へ。」黒右「イヤサ身共が國許の下役唐崎松兵衛といふ者、宮城野の萩見物の折柄彼奴手自慢で此の扇、呉れた古歌、また今日逢うたそもじの名も宮城野とは、誠に是れも結ぶの縁。」宮城野「イエく初にお目にかつて、かう申すもどうやら何とか思ひなんしよが、結ぶの縁の門違ひさ。」黒右「是れは迷惑、執心で参つたに違ひは御座ない、何の其許にあかはらはたれ申さぬ。」と、急げばつい出る國詞、新造「モシ花魁へ、爰にも赤はらがるいんす、主も奥州者だな。」と、云はれて鶺鴒が恠り眞面目、黒右「イヤく身共は京ぢや、京生まれぢや、夫れぢやさかいで方々奉公して、奥州にも少し居た事もあれどチャ、夫れはずつと久しい事だ。今は西國の大家に奉公する。江戸は始めて、生まれは京ぢや、京の六條數珠屋町夫れでサ、酒を呑むとつとやくたいぢやわいなう、無茶ぢやわいの。」と、訛り散らした京詞、宮城野は黒右衛門が奥州詞に心付き、妹を呼んで見せたさに、宮城野「コ

レ五町様、昨日來た十二三の子、奥州者とやら、モ可笑しい物言ひ、一寸爰へ呼ばんしよ。」五町「是れは面白うござりましたよ、サアしけり殿呼んでく。」黒右「ア、是れく何の在郷娘、呼んだとて酒呑む相手にはなるまいし、夫れよりはお稻かお直を呼びにやれ。」と、何か心に黒右衛門、胸に當つた此の場の時宜。五町「モシ宮城野様、あなたの詞を承るに、上もかみ最上でがなござりましたよ。唐崎様は女郎の名ではなし、松兵衛様とやらの事、松は唐崎ナア、霞は外山、のふさととなとさよいよえ。」伊平治「サアく此奴が當振で當てをつて、又こじ付けをるわい。イヤ申し旦那、口説の種の此の扇私がお貰ひ申しましたよ。ヤお供の衆も嘸御退屈、いつそ河岸へでもお連れ申しませうか。」黒右「夫れもよからうちや、早く行つて迎へは七つ半に來さつしやいぢや。」伊平治「ハイくそんなら花魁皆様、コレ五町、熊やそこを頼む。」と提灯の、ぶらく歩き出でて行く。熊は手酌で大杯。熊「サ、五町、さらば貴公へあけ屋町。」五町「オット戴き笠盛稻荷。」宮城野「オ、一人ながら大きな杯で主達はホンニマアすつてん童子を見る様でおざんすにえ。」五町「アイ私やすつてん童子だ。」熊「オ、俺もすつてん童子だ。」五町、熊「アすつてん童子くく、エハ、。大い戯けと騒ぎ飲み。秋夜「イヤ何、五町黒右衛門殿も最お休みなされたからう、マ、。先づ二階へ。」五町「左様でござります。イヤ申し花魁黒様を必ず牀で殺すまいぞ。」黒右「殺すとは諸侍を。」五町「ハテ可愛がつたりがられたり、氣も魂

もハ、ぬける故、殺すとは通の詞でござります。お侍でもお公家でも、名を取らうより牀を取れ、サアママあれへお出でなされませ。秋夜様と私は、奥へすいいきのぐい呑みと出かけませう、皆様奥へ入らせられませう。」五町「ア、すつてん童子くくく。」騒ぎにつれてぞ入りにけり。提灯提けて伊平治が、内を覗いて、伊平治「ア、黒様に逢ひたい物ぢやが、ドレマア座敷へ行て、アイく夫れでは人目が有る、大事の御状如何してお目にかけてうぞ。」と云ふを後に立ち聞く熊、持つたる状箱搔摺む。伊平治「コリヤ何ひろぐ。」と拂退け、「此の伊平治が持つてる物、ちよつかいをさつかけて、イヤどうするのだ。」熊「ハ、如何するとは知れたこと、何か密事の其の状箱、中を一寸見たいから。」伊平治「イヤならぬわ、鵜羽様のお馴染から、内證の手管の文、持つて来るのは船宿の役、外の者に頼みはせぬ、封目急度通ふ神、山の神には引裂かれても、いつかな見せぬ色紙をば、鼻つ紙の分際で、見ようとぬかすと土手下の、紙洗橋へ叩き込んで、還魂紙の涙を溢させるぞよ。」熊「ハア、面白い、花のお江戸町廣い中、此の熊が目通りで、時の京町と黙つて居れば、無上に味噌を揚屋町、モウ角町にして置かれぬ、伏見町の節々を、砕いても取らにや置かない、野郎め水道尻を打叩かれて、謝りんしたと云ふなよ。」伊平治「アノ汝が。」熊「汝が。」と互に詰め寄り軋合ひ、尻引袈裟身繕ひ、奥は騒ぎの三味線の、拍子に紛る、二人争ひ、後に伺ふ黒右衛門、作足きいたる伊平治が、急所を隙さず

眞の當、うんと許りにたぢろく熊、得たり彼處へ隠る、伊平治、何國までもと大野屋は、跡を慕うて追うて行く。黒右「伊平治様子は見届けた。」伊平治「スリヤアノ最前より何も角も御存じか、先刻御國元より御状到來、何角の様子は存せねど、中は密書と承る、夫れを嗅ぎ付け熊めが狼藉、必ず拙者にお心置きなく、御披見あれ。」と差し出す、状箱の紐解きほどき、封押し切つて繰り返し、讀む度々に恟りく、傍見廻し懐中の、矢立取り出しさらくと、手早に返事書き認め、黒右「使は葛屋に待つてをるか、某直に逢うて。」伊平治「イヤく、爰を只今お歸りあらば、何か譯のある様で、かへつて悪うござりませよ。何か知らねど其の御状は私が持つて。」黒右「イカニモく、心きいたる汝が有様、云ひ付ける事もある。先づ返事を些とも早く。」伊平「畏まつた。」と急ぎ行く。跡打詠め黒右衛門、状繰り返して、黒右「何々、先達貴殿手にかけれし逆井村の百姓與茂作娘、八年以前江戸へ参り、只今にては吉原にて宮城野と申す由、又々妹も當地を立ち退き候、定めて是れも江戸へと存じ候、必ず油断ある間じく候、急使早々申し遣はし候以上、唐崎松兵衛。スリヤあの宮城野が、ム、宵からの座敷の體、稍ともすれば心を付くる詞の端々、昨日來た奥州者、慰みに呼んで見ろくと云ふたは是れも確かに妹め、モウ此の家に長居はコリヤならぬわ。イヤく、高が女郎さい只一人、人知れず打放し、枕を高く寝るがよい、夫れ。」と刀の目釘を濕し、忍び入らんと伺ひ居る。彼方の座敷に密々聲、何事





狂言の楯、直に常悅様の御宿所へ参り則ち用金三百兩、跡金明日持參の上、宮城野殿は身受け致さん、金子は是れにござります。」秋夜「ホ、常悅殿の宿所まで行き戻り二里餘り、半時かゝらぬ其の内に、韋駄天走りは聞き及ぶ、日に三十里行く道の達者。」「ホ、熊川三平出かされたり。」と譽める詞に作平多島は、作平、多島「臺七此の場を逃げ歸りし上は、如何致し候はん。」秋夜「イヤ此の場を遁れ逃け去りしは、只敵討の用心許り。先づ宮城野が手附三百兩、亭主へ渡し、跡金は明日までと申されよ。」秋夜「宮城野の身受の金、是れへお渡し下さりませう。」秋夜「何其許は御亭主か、宮城野が身の代は六百兩とな、則ち手附三百兩、ソレ御亭主へ渡し召され。」多島「ハッ。」ト答へてならべる包、何心なく立ち寄る惣六、油断を見濟まし切り込む多島、身を躲して鏢元確乎、惣六「コリヤ何するのだ、ハ、アコリヤ又五町が、茶番狂言の稽古か、真劍ではヤ危い。」と、突き退くる間も兩人が、一度に抜いて切りかくる。「エイ。」とさそくに蹴上ける疊、我が身の楯に飛鳥の早業。秋夜「ヤレ手の内見えた、過ちあるな方々先づ引かれよ。」多島、作平「ハ、ア。」秋夜「ム、さて〜驚き入つたる御働さ隠しても隠されぬ新田家の浪人、島田三郎兵衛殿と疾くより知つたり、何卒南朝の御味方となり、我々が失望の片腕ともなり給はらば、常悅も祝著致さん、偏にく〜お頼みまうす。」惣六「イヤ申し大望と仰有りまするは、コリヤ夜具でも拵へるか、新造でもお出しなされますか、こゝは郭諸人の入り込み、洩れるも

易し、何をおつしやるも皆酒の咎、私は亭主、客衆の事は存じませぬ。又本名とやら俳名とやらを、明すも時節が御ざりましよ。何にも聞かぬといふ證據は、コレ誓紙の文言、宮城野そこで読んで見や読んで見や。」宮城野「ヤアコリヤ私が年季證文ちやござんせんかえ。」と、いふに驅け出る妹のおのぶ。惣六は引捉へ、惣六「小媚の良い故詞付も直したいと思ひの外、此の不器用では直るまい、内に置いても高が腰元、宮城野が受出された錢に付けてやる、随分目をかけ遣つてやりやれさ。」宮城野「ハ、ア有り難いお志、お禮は詞に盡されませぬ。」と、伏し拜み〜兄弟悦ぶ有様に、秋夜「何妹までも添へられては此方も痛み入る、せめては残りの三包を。」惣六「イヤモシ其の三つは捨鐘の、モウ九つの鐘も鳴る、コレ宮城野夜更けぬ中に早う行きやソレ。」宮城野「コリヤ大門の切手エ、忝い。」惣六「ハテ禮には及ばぬ、アレ引け四つのアノ拍子木。」

第八

我が家に、千尋の陰を覆の木松、牛込邊にゆつたりと、浪人ながら貯へに、餘る風雅の茶手心や、前も清き宇治の常悅、心置きなき友どちと、徒然晴らす夜話の、用意を兼て妾のおせつ、身の願ひさへ世を忍ぶと、おのぶが名をも改めて、竹刀、つか槍、仕合の稽古、懸聲いと柔しくも、流石手垂

の閨の友、傍に並み見る女子ども、皆それ／＼にか、へ襷、固唾口紅粉呑込んで、脇目も振らぬおせつが受太刀、付け入る信夫が八重垣くづし。おせつ「オ、出来た／＼信夫殿、破軍の太刀を四寸に拂ふ利方の工夫、心懸が見えました。」と、云はれてはつとよしばむ信夫、女ども口々に、おなよ「テモ扱も扱も器用なお子、モシさう機轉が利き過ぎては、追付男持たしやんして、お寢間の口舌に殿御をば、天井裏へ弾きあげ、腰抜かさせて拜ますは、ア、今の間の事である、ナウおすけ殿。」おすけ「オ、おなよの云やる通り、此方とも男に尻餅を、ほつたりこく／＼搗かす秘術を習ふ心掛、もちつと情に入れて置こ。」と才曲ぐれば、おせつ「ア、コリヤ軽忽な物の云ひ様、人聞きも宜しうない、重ねて急度嗜め。」と行儀も家の躰方、信夫は氣の毒取りなして、信夫「おせつ様のお詞、皆悪う聞かしやんすな。それに付いて姫御前の嗜みになる稽古のお相手、毎日々々習うても、心ばかりの不器用者、必ず笑うて下さんすなえ。追付日の暮お客のお出でに程も有るまい、次へ／＼。」にてんばども、あながう烏明いた口「ア利口なお子や。」を引潮に、皆々勝手へ入る跡に、か、へ解き捨て襷を外し、おせつ「オ、信夫殿、敵志賀臺七等は、常悅殿とは近しい中、鶴羽黒右衛門殿と云ふこと、其文字も姉御も知つての上、敵討を急ぐとの思ひ立ちは尤もながら、鞠ヶ瀬様との密事の企て、それに付いて黒右衛門殿、親しうするも一術と、常悅様の奥深い御思案、女の私が問はれもせず去りながら、兎角武藝が肝心關門、抑へて

置く敵なれば、今討たうとも儘なれど、稽古が足らねばまさかの時に、遅れと成ると吳々の御詞、それ故心勵みの爲、わしが稽古に準へて、そもじの稽古、こなたは嘘かしもどかしう思はつしやらう。」信夫「アイ私もさうは思つても、放れてゐる姉様と、一つにならねば討たれぬ敵、御二人様のお情で受出されてござんしてから、一度文の便りも聞かず、お爺様ともお鼻様とも、便りに思ふは姉様お一人此の様に音信のないのは、若し煩うても居やしやんすか、又と、様やか、様のやうに、ひよつとした事でも有るか、案じて暮す私が心、思ひ遣つて下さりませ。」と話す中にも憂き涙、「オ、道理ぢや道理ぢや。道理と背撫でて、身につまさる、露雫。落日の紅ういと照りそふ微酔ひ機嫌、常悅は閑居の障子、吉見勝右衛門に開かせて、肘打ちかける脇息褥。常悅「ヤ、ナント勝右、今讀んだ六書の中、柔能く強を制するとは、御身よくサ此の語を會得あつたか。」勝右「ハアコレハ／＼、先生の存じ寄らぬ御尋ね、成程其の語は孫子が、鶏陽山に入つて、賊軍を防がせるに、女兵を以て打ち勝つたる、例を引いて注せしとは。」常悅「ア、イヤサ／＼、其の女兵たると雖も、一致に心固まらねば、泰山に打つ卵にも劣る道理、季氏が野外に虎を射たる弓も矢も、鐵石ならねど心の羽ぶくら巖に立つ、何も案じる事はない、いま鎌倉中に名を知られた宇治の常悅、受合うた敵討、討たさいで濟むものかと、サ酔ひ紛れにむだ云ふは、勝右御免。」とそらせし話、此方におせつが、おせつ「アレ今のを聞いてか、こ

つちへ聞けと主のお詞、アノ一言を頼みにして、何にも案じる事はない。ヤ、モ、必すく急かぬがよいぞえ。」と諫めに嬉し悲しさを、信夫が便り杖ぞとも、柱時計の音冴えて、火や黠さんと告げ渡る。常悦「オ、秋の日足の心なう、今日も暮れたか。ソレ今宵は鞠ヶ瀬、稀人を同道と云ひ越された心待ち。ソレおせつ、放れ座敷の牀懸物、花も生けたか、釜も懸けたか。」「アイくく。」「あひの襖、ごし信夫を連れて勝手口、入るさの秋の風防ぐ、障子吉見が建て切る折から、次の間よりも咳拂ひ、鞠ヶ瀬秋夜入り来れば、あるじ常悦吉見諸共、夫れぞと出づる入魂の挨拶、そこく座も定まり、常悦「コレハく秋夜殿、在鎌倉の諸侯達へ、日々に出入の隙なき某、いつぞはお招き申し入れ、お話を存じをつた。ヤモ折に幸ひ、兼て密事の用談も、つゞく積鬱晴らし申さう、イザまづ奥へ。」と饗せば、「それは身共も同じ事、劍術指南の弟子衆は、皆歴々の大身故、平外の雑談も差し控へ、鬱散を心懸けしに、今宵の招きは別して樂しみ、秋の夜長の物語、久しく絶えしナソレ御秘藏の御調べでも承らう。」「誠にそれよ、琴三味線の連引きに、幸ひの相手を同道、ソレ松田氏おきのを是れへ。」早く早くの聲の下、彌多七連れて宮城野が、今は目立たぬ袖頭巾、地味な小袖も愛くろしく、切戸開いて、宮城野「オ、辛氣。御立關に待たして置いて、いつの間にも此のお座敷へ。」秋夜「オ、サ、二月ばかり程経ながら、まだ宇治殿へは連れだたぬ宮城野。」常悦「ム、スリヤ稀人とはおきのが事か、オ、よ

くぞよくぞ、サアくこちへ。」「アイく。」と、いんす詞もどこへやら、町と郭とをなひ混ぜの、かへ解くも艶かし。常悦も片頬に笑ひ、常悦「オ、今は郭の勤めも引いて、秋夜殿の世話になり、藝道修行と噂に聞いて、イヤモ何より重疊さりながら、今宵は分けて其方にも、ちと遠慮ある密々話能く御存じの鞠ヶ瀬殿、同道せられしには様子があらう。」「イヤ其の儀は此の彌多七が、参りがけにも申し居つたが、それに構はず同道なされた秋夜様の底意は。」と、云ふをうち消し、秋夜「ハテコレコレ松田殿、ソリヤ身どもが胸に有る。何は格別常悦老、かねておきのが頼み居つた、時節は今と存じの外、黒右衛門は鞠ヶ瀬の浪宅を出奔したと様子を聞き、こなたの思案も此のおきのへ聞かせ度く、同道したはそれ故。」と、云へどもとかうの答へもなく、常悦はあたりの碁盤、吉見に云ひ付け引き寄せさせ、外へ散らせし園碁の他事、常悦「何と秋夜様、先日勝つて勝ち据ゑた返報がへし、敵討の氣はないか、サア一勝負。」と碁笥の蓋、取れどもとれぬ宮城野が、心に心おく石の、秋夜も探る胸の端、かけて問はんと膝すり寄せ、秋夜「一勝負とは面白し、先づは先手。」と打つ石の、定石ならぬ常悦が、手前の角に控へる黒石、しかける鞠ヶ瀬遠巻きが、宮城野は目も放さず、願ひの辻占つけの櫛、引いて見るのも心のねたば、松田吉見も密事の甲乙、是れなんめりと差し覗く、秋夜が思ひをはねかける、宇治が一物粘ける鷹行。常悦「イヤ征とお出でか。」秋夜「してうとは、へ、、事をかしい、尻

もむすばぬ兩手がけ、是れでは黒が。」常悦「ア、遁れる手段、そこをしきつて追ひ詰める。」秋夜「ヤコレ此の白、石ナ此の白石の敵討。」常悦「ム、敵討々々、今一打ちを此の席で、のぼすが上々上分別。」宮城野「ソレ黒石が隅の手に續かうとするわいなア、ドレ／＼黒石は水の色、北朝に渡らせぬ運びが見たいなア。」吉見「ヤ小賢しい黒石殿、どう逃げたうても此の白石、ム、持か劫か此の吉見も。」宮城野「そこを一目かう上げては、秋夜様必ず油断を下さんすなえ。」秋夜「オット合點油断はせぬぞ。」常悦「イヤまだ早い／＼、油断がよいぞ。」秋夜「何早からう斯う追ひ詰め、ハア油断せぬか。」宮城野「油断せぬとはお氣みじか、それナア向うを切るわいな。」と、我を忘れて急き立つ宮城野。常悦「ハテ差出過ぎた黙れ。女に習うて秋夜殿が相濟まうか、不躰千萬、控へて居よ。サア秋夜殿、お手はこなた、早く／＼。」秋夜「ア、手前かなア、手前がお手は女に習ふ／＼、女々々、オ、女でも岡目八目助言に付くが當世。」と、渡る所を渡らせぬ目算違ひに流石の常悦、常悦「イヤ秋夜殿其のお手御無用、折角助ける黒石を。」秋夜「オ、打ち詰めた白石が智、此の間の敵討、念なう本望遂けたり。」と、聞いて一間に伺ふ信夫、宮城野諸共氣もいそ／＼。常悦は氣色を變へ、常悦「ヤア差向ひの甲乙を、詞の助太刀受くるさへ、大人氣ない鞠ヶ瀬殿、女を頼みに打つ棊なら、常悦が相手に足らぬ、無禮至極。」とねめ付ければ、秋夜「ハ、ソリヤ貴公が大人氣ない、尤も棊に打ち入るときんば、人事を忘れ禮儀を缺く

事、前九年の頼時など、まゝある例といひながら、それは格別、コリヤコレ高が女、ア、嗜み召され。」とやり込むれば、氣の毒さうに宮城野が、宮城野「ほんに私とした事が、座席もろくに辨へぬ、不調法は郭の癖、お赦しなされて下さりませ。」常悦「ハテさて喧しい、下れ。育ち賤しい流れの女、常悦に近寄つて無禮の助言、嗜め。」と棊筭おつ取つて打たんす能き圖へ、おせつが驅け出で絶つて止むる一座のしらせ。秋夜は手を組み此の場の様子、何を知つてと振り切る常悦。おせつ「イヤ申し左様でござりませぬ、様子はあれから聞いて居りました。常々のお心ばへに、似合はぬ御短氣、皆様の思召しも氣の毒さ、殊更此の子は鞠ヶ瀬様、お世話に遊ばす今の身の上、云はば當座のお氣慰み、棊にお負け遊ばしたがる恥辱になるといふではなし、御機嫌直して下さりませ。」と、詫びる詞に宮城野が「私が足らはぬ心から、お師匠様とおお主ともお力に思ふお二人様、お見捨てあつて是れがまあ、何と望みが叶ひませう、コレ申し秋夜様、お詫び申して下さりませ／＼。コレ申し彌多七様、お詫び申して下さりませ。コリヤマア何と致しませう、コレ申し常悦様堪忍して下さりませ。」と願ひある身の本の下に漏る、涙のあやもなき。常悦は立てたる燈火、傍なる棊盤を片手煽り、闇と消ゆれば驚く面々。秋夜横手を礎と打ち、秋夜「ハ、ア及ばぬ／＼。天に翼し地に跨がる貴殿が所存、察し入つたは秋夜一人、端ぢかで些細の論、云ひ散らすも拙し／＼、奥へ推參仕らう。」常悦「ナニサ／＼、常悦が火を消し

たは宮城野が阿婆摺の、所作柄見るも餘り氣の毒、暗闇の強意見、香やは隠る、我が工夫、色をも香をも、ア、秋夜殿の早呑みこみ、深入りばし給ひそ。」と、故由籠り句の詞のにべ、心おせつも宮城野も、思案取りく。常悦重ねて、「秋夜殿イザ一聞へ、皆も一所に、コリヤ宮城野、必ず今の強意見跡に残して忘れぬやう、篤と心をナウ鞠ヶ瀬殿。」秋夜「誠にそれが肝心要。常悦老の志、イヤサ縦ひ心に忘れても、汲みやしつらん旅人の、高野の奥の玉川の水く、ナ合點がいたか。」と底意をば、残す詞の露の夜や、暮に數ある鞠ヶ瀬が、屈せず疊む胸の内、涼しき宇治の常悦おせつ、松田吉見も諸共に、心をかねて入りにけり。跡宮城野が物思ひ、色なる浪の月代や、定かに萩の穂に出づる、影さへ遅き願ひの一圖。宮城野「郭で皆のお話しあつた、常悦様のお情とは、どうやらそくはぬ今の仕儀、合點の行かぬお心を、汲みやしつらん旅人の、高野の奥の玉川の水とかけたるお詞の、謎かは知らねど解けやらぬ、様子ありそな仰有りやう、ハテどうがな。」と、とつおいつ、軒端信夫が奥よりも、そろく、朧月影に、「姉様こゝにござんすか。」宮城野「ヤアさう云やるは妹ぢやないか。」信夫「アイ。宮城野「オ、息才で嬉しやく、逢ひたかつた。」と取り継る、便り涙の姉妹が、思ひに寢る、哀れさは血筋の縊や糾るらん。信夫は涙の目を拭ひ、信夫「申し姉様、此の東で名に知れた、常悦様にお頼み申すは、佛神の御引合はせと、お前の云うて下さんした、詞にいと頼もしく、お世話になる内おせつ

様のお情まで、残る方なき稽古の修行、奥州者と知れぬ様と、詞付までお世話になり、恩に恩ある常悦様。されども本望達するは、急くな早いと止めてばかり、其の上先刻の棊の腹立、私や立ち聞きし居りました。頼み切つた常悦様、あのやうに仰有つては心置かれる姉様。」と膝に凭れて嘆ち泣く。宮城野「オ、さう思やるは道理ぢやが、浪人ながら大名高家に、もてはやさる、常悦様、か弱い其方や此の私に、頼まれさつしやる氣は金鐵。ガよもやとは思へども、目指す敵の黒右衛門、麴が谷を出奔して、行方知れぬと聞けば聞く程、云はば古主の惣六様の、志も立たぬと云ひ、便々と待つては居られぬ、工夫思案も互に女、果敢ない所存と此の世の夫谷五郎様、未來の父様母様の、草葉の陰よりお呵りが、思ひやられて悲しや。」と手に手を取つて又濟々。苔の下行く木々の露、涙の隙に懐より、位牌取り出し庭の面、手向は父の恩に知る、須彌山形の手水鉢、上にとりく、沖津海の、母の位牌を立て並べ、ともに敬ひ手を合はせ、宮城野「栖霞了養信士、俗名は父様の與茂作様、丁度今宵が御命日なむ阿彌陀佛く。それから程なうお果てなされたお母様、殘霧妙養信女様、お前の手引で遙々こゝまで、尋ね迷ふ父の敵、陰身に添うてお守りなされて下さりませ。」と、姉諸共に廻向の合掌、傳ふ雫に水晶の、珠數繰りかけし桂陰、「御養育の御恩も送らず、程遠い此の地へ来て、隔てて居れば二親のお過ぎなされた月日さへ、七日々々の弔ひも、知らで過した不孝の不孝、重きが上の憂き勤め、鏡に

向ひ融く紅も、思へば血の池、氷の地獄、罪のありたけ仕盡した、今更せめてと付け狙ふ、敵に廻り逢はせてたべ。さは去りながら女の身の、二人より外便りのない、わたしらを娘に持ち、極樂世界へ成佛とも、拜まれ給はぬ未來の闇、嘸かし迷うてござらうと、悲しいわいのく、妹。「口惜しい姉様。」と、位牌の前に身を打ち伏し、涙にすだく蟲の音に、いと秋さへ更けぬらん。宮城野やうく泣く目を拂ひ、宮城野「コレ、妹、そなたを世話の常悦さま、わしとても受出され、武藝を教へ貰うたる恩義の深い秋夜様、縦ひお心背いても、黒右衛門さへ討ち果せりや、お二人の世話甲斐は有ると云ふもの、爰を抜け出し黒右衛門、何所に居るとも尋ね出し、討たうとは思やらぬか。」信夫「オ、さうでござんすとも、黒右衛門が居る所、火の中水の底にもせよ、顔は見知つて居りまする、探し出して討ちませう。」宮城野「オ、出かしやつた、サアおぢや。」と互に帯締め裾打合はせ、件の位牌を守りと肌、用意の懐劍一文字に、驅け出すあとより、「待てく女云ふ事あり。」と聲かけしは、宮城野「座敷に誰も人は居ぬが、庭傳ひに來はせぬか。」と、月に透せど定かに知れず、ハテ何所からと盤桓る「イヤ爰から。」と庭先の、井戸の中より水にも濡れず、ぬつほり鶴羽黒右衛門、段平大小長月代、鑄びたる井桁靜かに踏み越え、のさく上る縁の上、續いて兄弟かひくしく、面々懐劍抜き連れて、左右に圍へばぢろりと見て、黒右「オ、出かすく。此の黒右衛門を汝らが敵、志賀臺七と知つたか知らぬか、腰

押し討たせてやらうと、常悦秋夜が隠まうた宮城野信夫、親の敵の此の臺七、討つて本意が遂けたからうなア。」宮城野「オ、云ふにやおよぶ、思ひ込んだ父様の敵臺七、ヤ、其方を討たいで置かうか。」黒右「オ道理々々、其の健氣なる汝達が所存を感じ、敵討の勝負して、討たれて呉れうと云ひたいが、マアならぬ。」宮城野「イヤく、なつてもならいでも此の場を遁して濟む物か。」黒右「オ、濟む、コリヤ濟む譯を云つて聞かさうか。元來常悦秋夜ともに、思ひ立つた大望有る故、此の黒右衛門を密々に頼んでナ、アレあの空井戸より叶山の寶藏へ抜道掘らせ、大望の用に立てる金銀を取り入れさせは、なれども人の聞えを憚り、麴が谷を出奔させたも、ナコリヤ、皆常悦と相談づく、汝らが怖うて逃げたでない。斯うした密事を頼まれる黒右衛門、るのけの様な耄、一疋や五六疋殺したとて何の事、また其の上に楠原普傳が家に傳へし一國殺しといふ毒藥、忍び松明の秘授秘傳、普傳が死後に知つた者は、日本に某一人。」宮城野「ム、スリヤ、其の秘方此方が知つて、常悦様に傳へるのか。」黒右「マ一寸小口がこんな物、まだ此の胸に大海を呑み干す器量、兼ね備へた黒右衛門、汝らが敵といふソ、其の頬桁、歪まぬ中に取り置くと、飽くまで悪口憎しとは、思へど恩有る常悦が、望みについてる人と、聞いては刃の手も弛み、宮城野「ム、スリヤ先の詞の端々、未だ傳授も受け給はず、高野の奥の玉川の、水によそへし毒藥の、秘方を知つたアノ臺七、お二人望みの叶ふまで、コレなう妹、此の敵

は討たれぬわいの。「姉様コリヤマア何と。」「如何せう。」と、積る恨みを姉妹が、恩義に迫るはらはら涙、落ち瀧津瀬の吹き越して、懸樋も月に照り添へり。黒右衛門顔さし覗き、黒右「ちつとさうもあるまいなア。イヤ又郭で見た時より、格別違うた其の泣顔、生地顯はして美しい。コリヤ宮城野、とても義理ある常悦が、爲にならぬ敵討、さらりさつと止めにして、黒右衛門が心に従ひ、應と云つて抱かれて寢い。」といと、憎體應答もせず、無念々々を堪へる二人。黒右「ハテ其の様にひこしやくせずと、サア身が可愛くば返事しや、どうぢやく。」をさ、へる信夫、引き退け突き退け宮城野に、ほうど掩き付く慾惡煩惱。宮城野「エ、爰な大悪人の鬼よ蛇よ、そもやそも現在の。」黒右「オット敵は知れて有る、粹に育つた様にもない、寢れ給へ。」と、肌に入手を入れ傍若無人、又取り絶る妹を蹴飛ばし、黒右「ハテ氣の通らぬ、見ぬ顔せい。」と、うきを宮城野ふり放す、手に當つたる以前の位牌、引き出して、黒右「コリヤ何ぢや、栖霞了養信士、俗名與茂作、ム、コリヤ身が手に懸けた汝らが親の位牌ぢやな。」「それは。」と兩人取り付くを拂ひ退け、黒右「サア宮城野、應と云うて爰で寢るか、厭と云へは此の位牌、踏み割つて退けるぞよ。エ、否か應か、否なら親を踏み碎かうか、サアくくくくく何と。」と付け廻され、不便や宮城野泣く音さへ、聲を信夫がおろく顔、いつそ詞も出でばこそ、顔見合はして齒をくひ締め、口惜し涙堰きあへず。黒右「エ、めろく」としふとい性根、目覺しさせん。」

と位牌打ち付け、踏み付けく粉微塵、「コレく待つて。」も聞かばこそ、位牌と共に縁より蹴落し、黒右「コリヤ女郎共よう聞けよ、敵なんぞと身が傍へ寄りあがれば、此の位牌がよい手本、骨も皮も粉に成つて、ばつばと散るが大事ないか、命が物種止しにせい。」と不敵の仕業にせき上げく、宮城野「コレ妹、モウくく、義理も情も恩も實義も、思はれぬ様に成つた。一度ならずお位牌まで、二度の敵の志智臺七、覺悟しや。」と立ち上る。秋夜「ヤア兩人しばし疎忽すな、鹿相せまい。」と後の襖、引き開けく鞠ヶ瀬秋夜、おせつもろとも小四方に、一通取り載せ黒右衛門が、右と左に差し置いて、秋夜「貴殿を敵と附け狙ふ二人の女、刀を指す役目なれば、頼むに引かず隠まへども、向後彼らに加擔せず、足下に引くまじき神文。」おせつ「アイ、秋夜様と御一所に、常悦も同じ血判、お渡し申せと妾を名代、サア御披見あれ。」と兩人が、詞に彌鼻高々、黒右「ム、ハ、ハ、ハ、ハテ御丁寧な神文、まづ何かは差し置いて、へ、見るにや及ばぬ、ソリヤ其の筈、叶山へ拔道掘り開け、軍用に手づかへさせぬ、是れ一つさへ貴様方の守り神も同然、其の上に一國殺しの毒藥、忍び松明の傳授まで覺えぬいた某、貴殿を始め常悦殿へも云はつしやれ、ソレ足も向けて寢さつしやつたら、眞赤な罰が當るぞや。」と、上見ぬ驚のはねかけ顔、せきのほす氣を宮城野信夫、静めくして手を支へ、宮城野「是れまで段々お世話に成り、親の敵志賀臺七、討てばお望み叶はぬとは、知らぬ願ひも詮ない事、お情の御恩報じ、





か。コリヤ／＼姉妹赦してくれる、今こそ敵尋常に、討てよ勝負。」と突き放せば、今更何と宮城野も、信夫もともに、「私ら故、御大望の妨げに、成ると聞いてはそもやそも。」おせつ「イエ／＼大事御ぞんせぬ、今の様な悪口聞いて、女の身でさへ悔しいに、秋夜様のお腹立、更々無理とは思ひませぬ、構はず勝負。」とおせつが勇め。猶逆立つて黒右衛門、黒右「云ふまい／＼、あいつらが荷擔せず、身共に弓を引くまいと、兩人が其の神文、反古にして武士が立つか。」秋夜「オ、此の神文こそ我々が、大望に代へ力と成り、その方を討たせ呉れうと、宮城野信夫へ遣はす血判、最前見ぬが汝が不覺。」とおせつ諸共押し開けば、狼狽へ眼に見て悔り、黒右「エ、謀られたか残念々々。此の上は破れかぶれ、鎌倉へ注進して、追付吠顔、待つてをれ。」と、驅け出す後に宮城野信夫、懐劍抜く手も見せばこそ、伺ひ寄つて雙方より、がばと別られ七轉八倒、無念々々と黒右衛門、狂ひ死に死にたるは、心地よかりし有様なり。秋夜おせつも煽ぎ立て、手柄々々と賞する中、奥より出づる松田吉見、旅装束に風呂敷携へ、松田吉見「ハア、出来た／＼。様子はあれにてお聞きなされ、常悅様のお指圖にて、アノ女中を介抱し、奥州表へ送りながら、先途見届け立ち歸れ、急ぎの使延引すなど、我々に仰せ付けられ、取る物も取りあへぬ此の支度。宮城野殿信夫殿の支度も道にて調へん、サア／＼早う。」と急ぎ立てば、「何から何までお心遣ひ、せめてお禮を皆様へ。」松田吉見「ヤア禮所でない本國へ、早う知らすが此方

の世話甲斐、關所も氣遣ひ臺七が、首は跡より送るべし、早う／＼。」とおせつも共々、「お詞背くは却つて無禮、そんなら皆様よい様に。」と、彌多七勝衛に伴はれ、まだ明けやらぬ出汐や、陸奥さして急ぎ行く。跡は月澄む客路次の、陰も遙かに見送る秋夜、おせつもともに一間に向ひ、秋夜「安堵有れ常悅老、事調ひし。」と詞の下、障子押し開け主の常悅、白無垢居士衣も祭忌の著服、出づる燈火輝く庭先、黒右衛門がのたれし死骸、むつくと起きて立つよと見えしが、水氣忽ち漲る白砂、見とれる宇治が照月にユソタヤデイスの幻法祕印、ほどくに猶も吹く水煙、ともに跡方生々しき、血も屍も消え失せて、残るは以前の天眼鏡、居士衣の袖に飛びうつる、邪術の奇特目の傍、神變稀代と云ひつべし。二人も不思議と感ずるばかり、常悅指さし、常悅「アレ見られよ秋夜殿、我兵部助と云つしとき、諸國を經廻り、洞理軒に習ひ覚えし隠形分身、奥にて示し合はせし如く、幻法にて此の鏡を、黒右衛門が形と顯はし、宮城野信夫に討ち取らせ、彼らが功を立てたると悦ばせ、本國へ追ひ還せば、是れより後に黒右衛門を、親の敵とねらふ者、鎌倉にはよもあるまじ、此の術なさん。」と明りを消し、「一旦捨てたる幻術なれども、去りがたき今宵、月陰にウルガンソン、観念せしかひ有つて、英雄の士を助けしは、サンダマルの加護なるぞや、アラ心よや悦ばし。」と、語れば秋夜が「持病の短慮、鹿忽の振舞、是れも幸ひ、とは言ひながら、いとしいは二人の衆。」「マダぐど／＼と黙り召さ。」と、制しと

どめて鏡を納め、襖障子に尻さし轄、常悦秋夜は居間の牀、常懸の大横物、掛地を取れば壁に隠家扉を内より大の男、上下鬘斗目青月代、身のしが隠す志賀臺七、正銘大小立派の人品、悠々として座に直り、常悦秋夜に一揖し、黒右「叶山の軍用役、仕果せて立ち歸り、御所望故に天眼鏡を渡せし上、忍び松明毒藥傳授、御望みなれども今以て、お傳へ申さぬ某が、心底を推量あり、宮城野信夫を追ひ還されし、今宵の幻術驚き入る、高が女の事ながら、サ油斷大敵、是れより世間の廣くなるも、云はば御兩所入魂のお蔭。剩へ今曉明六つ、御大身へ御目見えの御推舉まで、なし下されしお世話のお禮、ヤモ詞にも盡されず。此の上は毒藥傳授忍び松明、祕方の一卷、楠原普傳が家の祕密を御譲り申す、必ず他見御無用。」と、したり顔に懷中より、出す一卷を押し戴き、秋夜と共に繰り廣げ、常悦「ハア明白々々、去りながら、鳩鳥の生血を搾り、砒石の煉様射岡の法、水に混へて濁らぬまで、全く傳書に顯はし難き、口授口傳あると聞く、共に師傳をあかさされよ。」と、蛇の道さすが平身低頭、餘儀なき詞に、黒右「ホ、流石の宇治殿奇妙々々。其の口傳こそ祕中の祕事、申したけれど人や聞く、ソレおせつ殿、硯々。」心得おせつが牀の間の、料紙の蓋をとり、黒右衛門筆おつ取り、かの一卷へ書き添へる、毒の分量蠻味の奇製、残る方なくさらさら、書く度々に常悦が、悦喜に連れてぞく／＼鞠ヶ瀬「臥龍烽火の陣松明、火箭の奇法も序ながら。」と詞に隨ひ文字に運びて口傳の奥義、

残らず暫時に書き認め、筆差し置けば一卷を、巻き納め、常悦「ハ、有り難しく、英雄の士を得たればこそ、粉骨碎身しても得がたき此の一卷、望み足りぬる時節も今、秋夜殿、悦び召され。」秋夜「誠に身共とても、日頃の心願満足せし、是れと云ふも黒右殿の御懇志故。」と只管禮讓、詞についておせつもいそ／＼、「是れからはいつまでも、お申よう御立身を待ちまする、マア酒一つ。」とあしらひも、東の空に茜さし、月も入るさのおしあけ方、常悦「アレ／＼最早夜明の鐘、御目見えの刻限違へず、扇が谷の御屋敷へ、イザ黒右殿趣き召され。」と、詞に猶も打點き、黒右「コレハ／＼御深切。」と、庭に折から數多の歩立、銘々鐵砲切火繩、左右にこそは居竝んだり。黒右「常悦殿、コリヤ何故。」常悦「ホ、ウ、御屋敷までの途中にて、萬一今の女が餘類、待伏せなど致し居らば、彼等に云ひ付けたつた一打、ヤモお手下されるには及ばぬ。コリヤ／＼方々、黒右殿の前後に引きそひ、固めの手配り氣を付けよ。」と、残る方なき心遣ひに、「却つて痛み入り申す。」と、おせつが送りを辭退の式臺、臺七郎が出世の門出、追付知行を鵜羽がさね、おさらばさらばと見送る常悦、秋夜が實義黒右衛門、力身反つて出でて行く。仕済ましたりと三人が、吐息つく／＼次の間より、何時の間にかは宮城野信夫、白無垢纏鉢巻まで、用意につれた松田吉見、銘々出づる密々聲、松田吉見「御兩所様のお心ざし、あのお二人に聞きまして、すぐに裏から用意の立立、シテ／＼黒右衛門は何方へ。」「オ、兼ての場所は扇か

谷、所の役所へ届け置けば、苦しうない早うく。我等も跡より後詰、門出の饒別此のやい鎌、お氣の付いた秋夜様、宮城野殿へは此の長刀。「エ、忝い。」と姉妹が、勇み進んで立ち出づる。常世「コリヤ必ずおくれを取らぬやう、心の備へは爰なるぞ。」と、一句の示しに勵まされ、おもひ詰めたる宮城野信夫、物をもいはず手水鉢の、片側すつぱり長刀の、音より妹が飛石を、二つに鎌のむね打ち割り、信夫「サ是れでは討たれますまいかな。」「出かした行け。」を氣のはり弓、矢竹心に追うてゆく。秋深き草葉も半ば照りそめて、露ぞ置くなる扇が谷、常悦秋夜が同意の面々、勝負の場所を固めの手配り、立てに立てたる辰の刻、肩臂張つて志賀臺七、一圖に目見えと仕済まし顔、來かゝる陰に人數の騒ぎ、早押推の小腹を屈め、黒右「コレハ、御大身より、某を御迎への方々ならん、嘸お待ちかね、思はぬ隙入り、何れも御前宜しき様、お取りなし下されよ。」と、揉手を構はぬ堅めの人々、整個人「ソリヤ黒右衛門逃さぬ様、取り巻け圍へ。」と身構へに、悔り仰天黒右衛門、黒右「扱は汝等は最前の、女めが餘類ならん。夫れもぬからぬ常悦老、秋夜の指圖は此の時く、ソレ火蓋を切らつしやい。」と、猶も落著く黒右衛門、中に取り込み一同に、動かば討たんと、狙ひの筒先、黒右「ア是れ、身共を討つぢやないわいなう、エ、悪い呑みこみ。」と、一人氣を揉むあひもあらせず、宮城野信夫伴うて、驅け付ける島田三郎兵衛、思ひがけなく出で來れば、なほく不審のきよろく眼。三郎兵衛聲をかけ、

「ヤアうつそりの黒右衛門、宇治鞠ヶ瀬の術にて、心を赦し傳授の祕方、とくと知られし上からは、我意に誇る汝が自滅、觀念して尋常に、此の兩人と敵討、用意の場所へ誘き出せしと、松田吉見が知らせによつて、常悦殿秋夜殿になり代つて身共が後詰、遁れぬ所、覺悟せい。」と、聞いて臺七地團駄踏み、黒右「エ、又謀られし口惜しや、モウ此の上は死物狂ひ、肩持つ頼みの女郎ども、すたくに切りさいなみ、汝等が大望残らずぶちまけ、注進して腹癒ん。」と、りきんで見ても鐵砲に、弱れど負けぬ佛頂顔、わるさ子供に二日灸、逃げそ、くれのだ、け者、追取り巻いて宮城野信夫、今ぞ誠の敵討と、勇む人々サア勝負、勝負々々とせり立てられ、ふしようく上著を脱ぎ、白無垢ばかりに身輕の出立、三郎兵衛氣色を改め、三郎兵衛「當所の役人諸共に、宇治鞠ヶ瀬も遠卷ながら、あれなる假屋に見物あれば、晴れがましき此の勝負に、後めたき臺七が白無垢の肌付、ソレくいづれも吟味あれ。」と、指圖に皆々立ち寄つて、兩肌無理に押し脱がせば、眼力たがはぬ鎖帷子、ソリヤこそ大きな卑怯者と、人前にて剥ぎ取られ、面目砂にまぶしける。宮城野信夫もぞくく小踊り、天へも上る心地して、假屋の方を伏し拜みく、残る方なき御恩の程と、矢來の場所へ立ち向へば、臺七も眩きく、恨めしさうに睨めまはし、同じく入り來る矢來の内、島田も引き添ひ聲勵まし、三郎「仇ある者は相互の敵討ち、勝負の勞れを太鼓の數、音を究めてかけ引きさせ、縦ひ討つとも討たるゝとも、互の運に

任せよと、常悦老の指圖なれば、雙方共に心得られよ。」と例格故實の茶椀に水、敵と味方の前に置き  
 三郎「イザ尋常に。」と矢來の外へ、引けども心は引かぬ氣に、息を詰めたるばかりなり。姉妹進んで聲  
 をかけ、宮城野「先つ頃奥州白坂の城下に置いて、其方が討つたる與茂作が娘宮城野信夫、爺様の敵志賀  
 臺七、サア立ち上つて勝負しや。」臺七「オ、身が手にかけた與茂作が娘、兩人、返討だ、觀念せい。」  
 と、拔身引提げ立ち向ふ。宮城野は以前の長刀、信夫もともに鎖鎌、互に心を一致の金氣、殺伐鋭き  
 臺七が、秘術にひるまぬ柳が枝、雪折れせざる姉妹、目放しもせぬ三郎兵衛、外の見るまへ、闘みの勝  
 負、火花を散らして、三重挑みあふ。始めの程は臺七が、嵩に懸つて見えけれども、骨髄覺えし兄弟に  
 惱まされるも天命の、石突返しに脾腹を圍ふ、其の間に得たりと鎌投げかけ、打落したる左の腕、右  
 へ廻つて又利腕、づんほら立ちの志賀臺七、無念とあせるを長刀に、脚打ちかけて一搦ひ、薙ぎ倒し  
 薙ぎ倒し、肋かけたる宮城野に、續いて信夫が逆手鎌、首掻き落し聲涼しく、信夫「親の敵志賀臺七、  
 宮城野信夫が討ち取つたり。」と、嫣然と笑うて立つたる有様、悦ぶ島田同意の面々、巢立の小鷹隼  
 が、鷲を羽うつて當てたる如く、感じ入る聲響める聲、暫しは鳴りも止まざりし。息つきあへず、  
 宮城野「是れ信夫、兼てそなたに云ひ置く通り、斯く本望を達した上は。」信夫「アイ、合點で御さんす。」  
 と、一度に一腰抜き放し、我と鬢切りかくるを、目早き島田驅け寄つて、二人が刃物抜き取り抜き

取り、三郎「コハ何故の剃髪。」「イヤ、お止めあるな。」とせり合ふ内、常悦「ヤア、兩人早まる  
 な、しばし。」と聲をかけ、常悦秋夜は假屋より、しづく出で来る悦喜の顔ばせ、宮城野信夫に  
 うち向ひ、常悦「密事合體の谷五郎に、所縁ある其方たち、秋夜殿と云ひ合はせ、本望を遂げさせし上  
 は、本國奥州石堂家の領分へ送り返し、時節を待つて金江氏へ添はせん計らひ、我々が心をだし、  
 押し薙髪は其の意得ず。」と秋夜と共に言葉の枷、有り難涙の顔振りあけ、宮城野「船車にも積まれぬ大  
 恩、お心背くでなければ、親の敵と云ひながら、女のさいに大膽な、人を殺せし罪亡ほし、親の爲  
 敵の爲、尼になるのがせめてもの。」三郎「ハテ氣の弱い、親夫に武士を持ち、姿を變へて先祖へ立つ  
 か。お世話あつた御兩所、此の島田が先途まで、見届ける所存はないか。」と、理に抑へられ、ハ  
 アはつと、さすが所縁の島田が諫めに、思ひとまりし姉妹の、操たがへず常悦が、討死の後骸の恥、  
 雪むる心阿部川や、彌勒の世にも朽ちせざる、恩がへしこそ殊勝なれ。時刻移れば常悦秋夜、同意の  
 諸士にうち向ひ、秋夜「イカニ方々、勝負を見届け當所の役人、假屋より退出あれば、日も傾きて遠慮  
 に及ばず、宮城野信夫が勝利を得たる、爰は所も扇が谷、大望成就も末廣がり、北朝を打ち破る、隠  
 謀評議の場所と定め。」秋夜「島田殿と我々三人、桃園に義を結ぶ、牛に等しき黒右衛門が、血汐を嚙  
 つて盟を立て、秋の木の葉の鎌倉を、ちりづくに打ち亡ほす計策の手始めよし。まづ奥州へアノ姉妹

送りの役を和殿に頼み、すぐさま軍勢催促を。」と、引かせぬ詞に三郎兵衛、三郎「いつぞや郭でお頼みの、鞠ヶ瀬殿も同座と云ひ、辭退致すもをこがまし。奥筋の一味を集め、此の鎌倉へ登るは何日頃。」秋夜一オ、夫れこそ毒藥地雷の相圖、發する時を手筈として、南朝の汗名を雪ぐ旗上げの惣大將、鞠ヶ瀬秋夜が心魂に徹したり。」と、きつと目くばせ常悦も、心を悟つて上著を脱げば、兩勇劣らぬ大將出立、錦の直垂萌葱勻ひの小手脚當、人集の中より陣羽織、采配牀几もいつの間に、菊水の旗翻翫と、揃ふ心の三郎兵衛。同じく上著取り捨つれば、肌に着込の滋金物、南蠻鎖も南朝へ、「一味の手始めはれ見給へ。」と、隠し持つたる塗込鞘、抜けば玉散る焼刃も鋭く、臺七が一の胴、死骸すつぱり血刀を天晴血祭心地よやと、兩將立ち寄りうち守り、秋夜、常悦「ハ、ア見事々々。焼刃は愚か中心まで、一目に著き貞宗の、刀は北朝不吉の切先、味方に有つては吉事の名作、ハ、頼もししく。」と、肺肝までも見透す度量、神機妙算同意の人々、共に感ずるばかりなり。宮城野信夫も盡きしなき、禮はつどつどおせつ様、情の因おく筋へ、直に出で立つ三郎兵衛、常悦も安堵の眉、常悦「關八州は秋夜殿、島田氏をば副將と、頼めば心に危みなし。返すくも短慮の振舞、心に止めて出されそ。我は是れより都へ登り、五畿七道を狩り催し、金江勘平に謀し合ひ、笠置の山に程近き、古郷の井出の親里に相留まり、鎌倉の騷動次第、彼の地にて旗上げせん。」と、秋夜諸共貞宗の、刃の血汐三人が、口に含め

る誓ひの暇、共に宮城野金江が噂、都の空も懐かしき、奥の心も細布や、島田が連れて行く二人、叔父への土産は臺七が、首を信夫がおし包み、涙も今を名残とは、知らぬ三人三方へ、別れ別る、一味の人数、共に評議の飛鳥山、淵瀬定めぬ 三重 習ひかや。

第九

道行いはぬいろぎぬ

爰の在所に良いこの嫁御、外の男に氣を揉み洗ひ、かいけ柄杓の、縁は千年かけ水の、流れと人の行末は、いざ白石や小石、千代に八千代と結びあうたる妹と春の、契りは堅き石堂の、館を出でて伊達助も、角の取れたる玉川の、里の紺屋の吉六に、千束の姫も陸奥の、古郷を捨てて井出の里、きのふは袖の錦木も、今日の細布手に巻いて、花の露添ふ玉水の、水仕奉公も慣れやすき、賤の手業の晒布、晒して染めて、水に幾度濡れた同士、互に肩も春の川邊の、麗かに山吹勻ふ岸傳ひ、晒場指して行く方の、山の端毎に花曇り、櫻を誘ふ春雨の、降らばかささん笠置山、降らずば木津の川風に、戀風添へて二人連、若草や寝よけに見ゆる嫁が萩、さいなくさうかいな。氣をつくくし細々と、文のすみれは筆つばな、八重山吹のかへす書、さいなくさうかいな。よい中同士としらつ、じ、浮名

菜種のさいたづま、うら紫の藤の花、さいなくさうかいな。浮名たつとも厭ふまじ、いとふまじとは思へども、袖を絞の鳴海染、思ひ切るせときらぬ瀬と、二世と書いたる誓紙の誠、必ずやいのと寄り添へば、私のゑ仕馴れぬ賤のわざ、堪へたもと締める手も、女たらしの袖のうち、ほんに此の頃しみくと、お顔の寒れを見るに付け、よしない私が有る故と、思へば身で身が憎らしさ。此の世は儘の若楓、色にぞ井出の下紐の、結ぶ縁はいつまでも、かはらに下りて棲絡け、かいしよらしけな取装も、面白や布つく振のやさしさよ。なつきにけらし衣干すてふく、なつきにけらし衣ほすてふ戀人を、慕ひ紺やのやさ娘、八尾六つれて玉川の、水のうつろふ花の顔、遠目にそれと見るよりも、八尾六「オ、イ、吉六イナウ、お竹ヤイ。」とどす聲も、思ひは同じ心の色香、落つる所は谷川の、流れに二人が立ち寄つて、娘竹「コレ吉六、あれを見や。」蝶が戀する色かせぐ、譯も女の心から、かいしよらしいがいとしようて、井出の山吹、男の木性、川の水性、夫婦ぢやと、固めた中ぢやないかいな。私も心は河原の眞砂、よみつくされぬお情と、寄ればお竹が押し隔て、「コレ男下に居や、さりとは悪性なく、男づら。エ、聞えぬ。」と顔背け、恨みかけたるなよ竹の、節を籠めたる憂き思ひ、中に分け入る八尾六が、引けど靡かぬ三味の絲、つんとしたのが猶堪らぬ。我等は何と奈良晒し、せめて一白搗かしておくれ、つき立ての布なんどは、力を入れてとんとつく。とんくとつくべと思へど、あ

の子の顔見りや手をつく、品ものめ、ほつとり者めえ、女夫晒が、ならざらしへ、とんとつく杵で、突張りかうたすんばいほう、ふりくすんばいほうくと抱き付き、靡けくと八尾六が、付けつ廻しつ、お竹をかこふ吉六に、纏る、娘振袖や、云ふも云はれぬ竹垣の、中を隔てて、アレくくく、見え渡るく、笠置木津川みかの原、いづれ劣らぬ名所かなく、立つ浪がく、瀬々の綱代にさへられて、流る、花をせき留めよく。所からとてなく、布を手毎に井出の里人うち連れて、我が家へこそは、三重 歸りけれ。

第十

京の水色よい染出しの、殿茶小紋を見初めて染めて、今宵必ずかならずやいの、松葉小紋の變らぬ色を、其方もサ、此方もサ、其方も此方も、思ひ合ふのが、ハテナ幸ひ小紋、諺諷ふは、泡の、寄る邊の水や井出の里、所に古き紺屋有り、彌左衛門とは通り名を、受けて世話役堅親父、弟子を相手に商賣も、如才夏物仕入時、受取り物は山吹の、花の女夫も夫れぞとは、云はぬ色なる伊達助が、姫諸共に此の家へ、染まりやすきは下さまの爪に藍滲む簪業、お竹と呼ばれ吉六と、變る姿を浮世なる。彌左衛門「サア、吉六もお竹も一服せい。ヤレくく、汝等はマア、來てまだ間もない者どもなれど、

心一ぱい精出して呉れるので、覺えた者より漸と仕業の捗が行くわい。此の八尾六は何所へ行たな。エ、間がな透がな出歩き居る。ア、大方湯屋で、又いけもせぬ新内節がな唸つてるをろ。ヤ夫れはさうと此のお娘は、まだ髪を仕舞はずかな。めんよう此の間は身仕舞に隙が入る程にの、いつまでも子供の様におもて居れど、親旦那がお過ぎなされてから、私が替つて世話するも、今年でかうと、ハ、オ、丁度あの子もモウ十七、そろそろと蟲の付きたがる時分ぢやてや。ア、どうぞ何事も無い中に、實體な能い婿を取つて、早う此の世話を脱れたい物ぢやが、ナウ吉六。」吉六「ハイ左様な事が随分とようござります、ナウお竹どん。」竹「ハイそんな事が大い能い事ぢやござんせぬ。婿様がないとそこら傍がそはくく、ひよつともう此方の人に。」吉六「ヤ何と云やる、お竹。」竹「イ、エサア、アノ此方のお娘御のお染様に、其の蟲とやらが付かうかと、私やたんと案じられます。どごぞかう遠い所から、早う婿様を取つて、お上げなされますがよささうな事のやうに、私は存じられます。」と思ひのたけを篠目に、詞のはりやもらすらん。彌左衛門は氣も付かず、彌左イヤサア、夫れでも滅多に氣を知らぬ者はどうも入れられぬてや。ヤ何吉六、其方は國に二親もないと聞いたが、定めてまだ女房も有るまいなう。」吉六「エ。」彌左「サ有るか。」吉六「ア、いや。」彌左「ム、まだ有るまい。」と打領く、心の工面澀面の、目顔で止めても止らぬお竹、竹「コレ申し旦那様、夫れ聞いてお前何になされませえ。」

彌左「ハテ何にせうと彼にせうと、其方が構ふ事ぢやない。ナニ吉六、一人身なればちつと此方に、相談の品が有る。」と、聞く程胸にあたりの人目、私が大事の男ぢやと、云つて仕舞をか如何せうと、急き立つ袂を引き止むる、男の手先へ焼煙管、吉六「オ、アツ、。」。「エ、仰山な、何所が熱い。」と目に角を、立てては見れど何處やらに、流石夫れとも得も云はぬ、女心のやるせなき。彌左「コレハしたり騒々しい。吉六にとつくりと、在所の事を聞かうと思や、めんよう女子と云ふものは、得知れぬ事を差出るものぢや、コレお竹、其方はこゝに用はない、奥へ行て共々に、お娘の髪を手傳うて、はやう仕事にか、らしやませと云や、サアいきやく。」竹「アイ。」彌左「エ、何をうじくと、きりく行きや。」と叱られて、跡に心はのこれども、是非なく立つて入りにけり。折からひよかく所のあるき、使工「申し彌左衛門さま、莊屋殿までたつた今、ござりませとの云ひつけ、サアくく早うくく。」彌左「エ、喧しい何の用ぢや。」使工「イヤ何ぢや知らぬが都から、高師泰様とやら云ふお侍が、何ぢやか大勢ひき連れて、お尋ねの筋がある故、村中をお召しなさるゝ。何ぢやか知れぬがござりませ。」と、せり立てられて彌左衛門、彌左「そんなら序に得意も一ぺん。コレ吉六其の布地拵へが出来たら、板場へ早う形付けさしや、どれ往てこう。」と引つかける、羽織の袖を通す間も、あるきがせがむ表口、とつかはとして出でて行く。跡見送つて吉六は、吉六「ハ、八尾六、モウ歸りさうな物

ぢやが、干物も取り入れたし、紋の上繪も急ぐと有るわ。」何からしよう染物の、絹の色々取り出し、  
 吉六「ム、コリヤ幕地、何ぢや書付は、紋丸に二ツ引、ム、はて合點の行かぬ。正しく是れは足利の定  
 紋、今目前に見るは是れ、此の虚に乗つて中黒を、押し立てよとある知らせなるか。但し時節を待て  
 とあるか、ハア、いや〜。エ、此方は何ぢや、瑠璃紺に釘貫、ハ、テモ大きな紋ぢや、エ、コリヤ  
 折介の看板物ぢやナ。ヤ夫れはさうと、お娘はもう出て見えさうなものぢやが、先にかた〜の約束  
 を、よもや違ひはあるまいが、首尾はどうぢや。」と戀人を、松帆の浦の夕なぎに、焼くや藻汐の身を  
 焦す、お竹はそつと差足に、奥の透間を忍び出で、お竹「コレ申し義興様、イヤアノナニ吉六殿、今更  
 云ふに及ばねど、斯ういふさもしい宮仕へも、此の家へ便つて常悅を、味方に付ける術の爲ぢやと、  
 おつしやつた様にもない、其の常悅は打つちやつて、妹娘の「アノお染を、どうやら味方に付けて、  
 此の家を取り立てるお心と、見たはまんざら違ひはあるまい。それでは互に云ひかはした、憂き艱難  
 も水の泡、聞えませぬ。」と取り付いて、わつと泣く口おさふる袖。吉六「ア、コレ〜〜〜聲が高い、  
 又しても我を忘れて、俺が心知らぬか何ぞのやうに、エ、嗜みや〜。」お竹「イエ〜〜〜、何ほ  
 其の様に云はしやんしても、此の道許りは。」吉六「ハテ扱愚癡な事ばかり。大事を抱へし此の吉六、  
 色に亂る、性根と見たか、皆是れ南朝の御爲。只我々が身の上を、けどられぬが肝要と、云ひ聞かし

たを忘れしか。」と詞にお竹も胸押しさけ、「女の愚癡な心から、見捨てられもする事かと、案じ過しの  
 餘りぞや。そもや館を立ち退いてより、母様にも兄弟にも、代へてお前が大切さ、手馴れぬ業も殿御  
 の爲と、辛抱してゐるものを、常々からお前は「アノ、此の家の娘と何ぢややら、面白相なさ〜め言、  
 わしが男と、いふも云はれぬ下女奉公、飯を焚いたり水汲んだり、いとしい殿御を寝取る女、エ、戀  
 の敵に様付けて、化粧手水の給仕まで、お竹どうしや斯うしやと、呼び使はる、憂さつらさ。紅白粉  
 やつや油、皆お前に見せうとて、髪まで私に小言許り、是れで好いかの何のとて、作る女の顔貌、美  
 しう移るとは、磨かぬ鏡の恨めしや。何の因果で娘御の、ある所へは奉公に、來た事ぞいの。」と恨み  
 泣き、洩れもやせんと義興も、心遣ひの折柄に、娘お染は吉六に、思ひ染め込む暖簾の、間より出で  
 て二人がそぶり、見るより俄に顔色變へ、「お染「コレ面妖なわがみ達は、人が居ぬと傍へ寄つて、見苦  
 しい。女の傍へ男が寄るといふ事が、どこの世界にある事ぢやぞいの、人が見てもじだらくさうで、  
 マア第一、主の此の私へ不躰と云ふものぢや。吉六も吉六ぢや、すつと此方へ退いて居たがよいわい  
 の。そしてコレ吉六や、此の染物は始めての受取り、念の爲ぢや、此の註文と引合はさう。」と、何が  
 な傍に置きたがる、娘心の戀の山、早入相に心急ぎ、息せきとして八尾六が、戻りかゝつて内の體、  
 ちらりと見るよりもがりの陰、伺ひるとも白布の、端をお竹がお相手と、向うへ直れば、お染「イヤ



イヤ／＼そなたは頼まぬ、モウやんがて日も暮れる、行燈の拵へして、御持佛へも御明しあけや。コレ吉六、爰へ來や、サア此の端持つて墨打ちを、見たたもやいの。」と寄り添へば、竹が傍からつこと聲、お竹「マア／＼／＼／＼お前も滅相な、いかにマお主様ぢやと云うても、そりやモウあんまりあつかましいといふもので御ざんす。現在女房の、イヤアノ、女房のない吉六殿ぢやとても、娘御のお相手になると云ふ事が、どこの世界にあることで御ざんすぞ。人が見ても自墮落さうで、マア第一、傍で見てるらる、ものぢやござんせぬ。ホンニ／＼吉六殿も吉六殿ぢや、まそつと此方へ退いてるたがよいわいな。」と無理に押し分け引き退くれば、猶逆立つて、お染「コレお竹、何の其方が差配だて。コレ吉六、主の云付け背きやるか。」と又引き寄せる主従が、あなたこなたと争ひを、見てるる八尾六むしやくしや腹、遠慮會釋も三人の、中へすつくり懐手。見るより恟り吉六お竹、うじ／＼もぢ／＼娘のお染、お染「コレ八尾六、二人ながら主の云ひごとを、ねつから聞きやらぬわいの、ちつとさう云ひつけてたも。」八尾六「へ、ん、ア、結構な事で御座りますわ。全體お前には此の私が、よつほど氣が有つた故、ちよ／＼しかけて見たけれど、主と家來の悲しさは、蹴飛ばされたら夫れぎりに、張り込みも云はれぬ故、エ、七面倒い打遣つて、思ひ切つてゐた所へ、マ、此の吉六、始めて目見えに來た時に、コレお染様、ソレお前がナ、アレ彼處からちよつとのぞをくれた其の時の、其の目つき其の

いやらしさ。ヤこいつはけたいぢやと思つたが、角抜くたびに鬚鏡で、俺が顔をつく／＼見るに、どうでも父上や母上が、俺を拵へらる、其の時は、甚だ喜悅で有つたかして、笑ひ／＼刻まれたと見え、つい此の様なちやり頭にしてのけられた。ア、いか様、お染様の氣のないも、無理とはさら／＼思はれぬと、とんと悟りを開いた所に、コ、此のお竹女郎、お前と吉六が味な目付をしたというては泣顔、何やら二人囁いたと云うては泣顔、ハアコリヤ羨まし涙ぢやなと思つて、何が寢所へ這ひかけたりや、久しいものぢやが、又はね出された。あちらでは突き出され、こちらでは弾ね出され、突き出したり弾ねられたり、悉皆油鍋へ心太、てんと堪らぬ、コリヤおたばう、おふくの中でのな様に、コリヤドどうぢやいやい／＼。何程そもじが吉六に、氣があつても、お主の娘御といふ、向うにアレ關がすわつてある、埒の明かぬ事に手閒取るより、コレ此の八尾六、少々付きは見憎からうが、心の内は絲櫻かな、何と付合ふ氣はないかいな。」お染「エ、コレ八尾六、あだ口を聞く手閒で、きり干物取り入れや。」と、主の權威にへらず口、「ア、あるは否なり思ふは成らず、ア、戀ほどせつないものはない。」と、眩きながら立ち上り、節くれ立つたるもがり竹、竿にひらく／＼、こなたはじやらじやら、お竹がくる／＼、繰り寄せて、引きあはせ見る吉六お染、「此の紋所の蝶々が、直に祝言媒役、そなたは男蝶私や女蝶、斯う染め込んだ此のそめが、かう引く布は天の川、比翼の蝶々合點か。

アノ不承らしい顔わいの。コレ此の布を斯う持つて、斯う引いて、斯う巻いて、斯う取り付いて。」と抱き付けば、吉六「ア、まうしく暑くろしい、アレくくく八尾六が、アレアノマ顔を御覽じませ。」お染「エ、何ちやいの八尾六は家來ぢやもの、大事な。」吉六「イ、エ大事が御ざりますぞ。」八尾六「つとモウくく悟り切つた此の八尾六でさへ堪らぬもの、凡そ人間たるべきものが、コレガマア見てるらるゝ態かいな、ナウお竹ほん。」お竹「ハテ、こちらは家來ぢやもの、構はずと見て居たがよいわいの。」と、いへど尻目や願で、當てつけらるゝ吉六が、吉六「アレくお竹も見て居りますぞえ。」お染「ム、見て居れば何とぞするかや、其方の女房ぢやあるまいし、かまはずとよい返事、おうといやらにや放しはせぬ。」と、ちとまだ早き染色の、二人がじやらくら八尾六は、物干竿をぐわつたびし、闇がり紛れかつちかち、かちく鳴らす火打石、竹が急くほど火も移らず、お竹「エ、どんな火打箱。」八尾六「エ、けたいなもがりぢや。」お竹「モウくくくあのやうにしたたるうては、炭も硫黄も濕るが道理。」八尾六「イヤモくくく染物も乾くものぢやないわいの。」お竹「エ、まだ火が付かぬは、氣が付かぬか。」八尾六「吉六殿も吉六どん、大事の染物のしはせいで皺だらけ、彌左衛門様が留守なりや、爰の内は暗闇ぢや。」と、火打こちくく八尾六は、仕事も脇へふくれ顔。八尾六「エ、吉六早う熨斗て仕舞はぬかい。」吉六「イヤ俺はのらはせぬけれど、爰へ来いとお召小紋、何するも奉公ぢや。ナ申しお染様

さうでん茶でござりませうがな。」八尾六「ム、地口置いてくりよ、夫れがどこに相傳茶、あんまり藍が勝ち過ぎるかな。」お竹「オ、八尾六殿の云うてぢや通り、イヤモウ今日も明日も、さめ小紋でござんす。」お染「イヤコレ竹、聞きにくい。そなたの殿茶か何ぞの様に、當世茶も知らずに、誰が頼んで色上げ吟味、こび茶な事置いてたも、お納戸茶にすつこみや。」と、云はれてせき立つお竹が目色、術ないは者吉六一人、染物手早に疊み付け、仕事場さして逃げ入れば「イヤくくく、彌左衛門の留守の内、返事聞かねば氣が濟まぬ。」と、續いて驅け入る娘のお染、心ならねばお竹も共に、行かんとするを八尾六が、後より引抱へ、八尾六「コリヤくくく君よ、二度とは云はぬ只一度、又一度が厭なら一分二厘でも大事な、コリヤ叶へてくれ。」としめる手を、すけなく振り切り飛び退いて、お竹「エ、八尾六殿、何の事ぢやぞいの、人の心も知らず、てんがうさんすと喰ひ付くぞ。」八尾六「ヤ何ぢや、喰ひ付く、へ、何のくく、喰ひ付かるゝは愚かのこと、少々はモ喰ひ殺されても厭やせぬ、幸ひ薄暮丁度能い首尾、帯をとかずとついちよく。」と、又取り付けばしつこいと、下地のもやくく腹立ち紛れ、傍に有り合ふたばこ盆、猿絹卷櫛、當り眼に投げ付けく、奥へ走れば八尾六は「コリヤ手ひどい。」と云ひつゝも、同じく奥に入りけり。春の日も西に傾く年輩も、昔小紋の片意地づくり、澀柿染のかうかつ親父、得意廻りの戻りがけ、ずつと這入つて、彌左「コレハさて不用心な、吉六よ、

八尾六、ナニお竹も、ソレ行燈へも火を點さぬかい。」ハイ／＼と納戸より、附木をしほに皆立ち出づる。彌左「莊屋殿仕舞うて、商ひ先の旦那衆、脈の上つた古懸、おこさぬは合點でも、次手ながら催促したりや、いかす村の孫三が、錢三百の内上げ、足のついでに戻りがけ、此の三方ねぎり詰めたが、俺が年と六十八文、三方が若いか、俺が年が安いか、サ、サ、皆よつて評判つきや／＼。コリヤ八尾六、染物はみな出来たか。」八尾六「ハイ、大方に片付きました。」彌左「おつとよし／＼。」八尾六「ヤコレ、お染様も吉六も爰へおぢや。コレ、こなた衆は味やるの、いつからのせ、くり合ひ、隠さずと云はつしやれ。」お染「オ、そんな事誰がいうた、こちら二人に覺えはない。」と、口は涼しく手はもちもぢ、吉六は只お竹が手前、顔もしかなの煙草ほん、呑まぬ煙に紛らかす。詞あらため彌左衛門「ヤコレお染様、叱るのぢやないが、俺が云ふ事よう聞かしやりませ。こなたの兄御勝助殿は、商人嫌ひの兵法好き、武者修行とやらに行かれたはとうの事、夫れを氣病にお袋の死なしやつたは去年の夏、臨終まで苦に召され、俺を枕元へ呼び付け、兄にこりた妹娘、好いた男と女夫にせい、頼むは其方、家の家督の極るまでは、町所をも勤めてくれと、俺が前の名長兵衛を改め、去年から彌左衛門と、かへたは爰の旦那の名、お袋の遺言なれば、好いた男と見て女夫にするのぢや。」エ、と恠り吉六お竹、娘はとかうの返事さへ醫に覆ふ振の袖。心のたけが手拭を、嚙んで振ぢ向く夫の顔、夫れと知らねば彌左衛門「厭でないやら、恥かしさうな、嬉しさうな、何やらも欲しさうなアノ顔。へ、へ、ハ、ハ、ハ、コリヤヤイお竹よ、何をばたくし居るぞやい。吉六も厭ではあるまい、直に紺屋の旦那殿。」と云へば八尾六差出口。八尾六「ソリヤマアあんまり急で、早速に返事もなるまい。マア受人にも相談して、親判から莊屋組中、向う三軒兩鄰、御念佛講へも談合極めて上の事。」彌左「ハテむづかしい、女夫中に受判や御念佛講は入らぬわい。又否といへば爰には置かぬ、追ひ出さる、か壻になるか、二つ一つの返事聞こ、どうぢや／＼。」と、詞にお染はもどかしく、お染女夫にしよう結構な料簡、何の否があるぞいな、ナウ吉六、さうであるかの。」彌左「ハテこなたばかり呑みこんでは、落著かぬ彌左衛門、おうといへば此の三方が、直にこん／＼の杯臺、何と八尾六さうぢやないか。」八尾六「ハイ、イヤモウこん／＼やら杯臺やら何ぢややら彼ぢややら、一向譯がない、とんとやくたいでござります。」彌左「何ぬかし居るぞい。竹もまだ二階掃き居らぬか、マ、帚持つて其の態何ぢや、エ、きり／＼行き居れやい。」お竹「ハイ。」行き居れやいと呵り付けられ是非なくも、塵に交はる紙屑を、お染が方へ掃き付けて、ぴんしやんとして上り口、彌左「ハテ仰山な女子ぢや。」と眩きながら立ち上り、彌左「俺が居るから結句遠慮、媒は宵の中、八尾六來い。」と引きつれて、勝手へこそは入りにけれ。跡にお染が何となく、今では結句改まり、心どきまき胸せかれ、言ひ寄る詞納戸口、有り合

ふ針刺引き寄せて、針のみ、ずに願ひの糸、通りも早き色の道、吉六お染が傍に寄り、吉六「申し、お染様、此中染めた此の手拭、ちよつと端になんたと印、松葉なりと縫うて下さりませ。」お染「ソリヤアノ、いつぞや時行つた歌の唱歌、まつにこんとはわしや氣に懸る、つれない心。」と寄り添うて、「私が心は此の糸を、斯うしたところが判じ物。」吉六「ハ、そりや知れた事、平假名のしの字。」お染「サア、いとしいわいの。」と、糾れ糸、解けかゝりし下紐の、井手の下行く水刷竿、深い浅いを探りあふ。吉六「申しお染様、チトお尋ね申したい事がござります。」お染「オ、改まつた、何事ぢやいなう。」吉六「アイヤ、何の事でもござりませぬ。ガ、アノ、お前の兄御は、宇治の常悦様と申しませうがな。」お染「イ、エ、兄様の名は勝助。」吉六「サ、其の勝助様が常悦と名を變へ、鎌倉にござるを、おまへ知らぬといふことはあるまい。斯う赦されて夫婦になるからは、何事も隠さぬが互の眞實、サどうぢやく。」とうらどへば、お染「サイなう、兄様は此の内を、家出して行かしやんして、夫れから一向便りもなし、力になつて共々に、お行方も尋ねてほしい。何かの咄もたんと有る、モウ夜も更ける行て寝よう。」と手を取れば、吉六「ア、得心で女夫になるから、今宵に限つた事ぢやない、今夜は延ばして明日の夜か、いつそ紺屋の明後日になされませ。」お染「エ、何ぢややら氣の知れぬ、私が心のやうにもない、こちへおぢや。」と手を引かれ、糸によるべのふしの間も、お竹が手前氣の毒を、ア、

せう事もなく入りにけり。一間の内に彌左衛門、持佛に向ひ打ち鳴らす、かねては母の遺言を、立てし位牌へお染が縁、結ぶを告げる看經も、昔氣質の撞木の音、なむ阿彌陀佛。ソレあたらし夜著出して、ナ能いか、なむ阿彌陀佛。春の夜の、そよ吹く風の音信も、あるかなきかの旅薦僧、此の家の軒にイみて、「昔に變らぬもがり竹。住居も變らぬ我が家なれど、今土手際の戸治が噂、母人は去年の夏、過ぎ行かれたと聞く残念、念佛の聲は慥かに長兵衛、冥途の母の呼び入れ給ふと、我が身の不孝が思ひ知られて、ア、詮なき後悔無益々々。」と、高きは父が譲りの敷居、越えて笠取る庭の内、誰を頼まん。」と案内の聲、彌左「アレどなたやら、お得意先からお人がある、ソレ茶でも持つて出ぬかいやい、なむ阿彌陀佛。勝助「イヤ勝助ぢや、身共ぢや。」彌左「トハ、前の旦那に生寫し。」と、不審立ち出ですかし見て、彌左「ヤア此方は息子殿ぢやないか。」勝助「長兵衛堅固で祝著。」と、草鞋解く間も待ち兼ねる、老が深切ほやく機嫌。彌左「ヤレ、嬉しや、サ、上らしやれ上らしやれ。今の先も此方の噂、家出さしやつたを、數へて見れば十三年、ア、今頃は何處に如何してゐるやしやるやら、今日は出世して戻らしやるか、明日は心も直つて歸らしやるかと、待ちに待つたる今月今宵、ヨウマア戻つて下さつた、と云ひたいが聞えませぬ。内の勘定なるならぬも知つてゐる此方、厄介を儕に振り向け、面白さうに薦僧姿、尺八の竹よりは、何故もがり竹に氣を入れさしやら

ぬ、罰の程思ひ知らしやつたか、トいうて其の厄介被つたを恩に著る俺ぢやござらぬ、妹御のお染様もモウ十七、髪かみの飾りや衣裳いしやうまで能い物が欲しい最中、此の間も云はしやるには、コレ彌左衛門、アノ鄰のおよし様のしてるさんす、黒縶子の帯おび、私にも何卒買うて欲しいとせがましやる。コレ此方も帯どころぢやあるまいぞ、ちと物に勘畧かんりやくさつしやれ、去年から段々の物入り知らぬか、随分内の仕事を精出さしやつたら、買うて進ぜると吐つたら、アイノ、随分仕事精出す程に、何卒買うてくれて、詞も返さず聞き分けるに、エ、こなたはなう。俺やモウ其の時には、コレ此の白い目玉から、黒縶子の様な涙かこほれたわいなう。」と、親方思ひの偏屈親仁、昔作りの形板に、地味な涙を流しけり。常悦もうち絶えて、勘當の身の悔み泣き、今更返す詞もなし。彌左衛門目を瞬き、彌左「コレ、まだ其の上に母御様も。」勝助「イヤ、御死去の様子は参りがけ、村はづれで承り、申さう様もない残念千萬。」彌左「其の残念が遅いわいの。ア、併し、今泣かしやるが眞實眞身、母御様が存生の中云はしやるには、コレ長兵衛、此の勝助めは何國に居るぞ、此の母が死んだら、日頃の不孝思ひ知り嘸勘當が悲しかる、若し心も直り戻つたなら、勘當を赦してやつてくれと、親旦那の名をおれに譲つて置かしやつた、久離は切れぬ、赦します。」勝助「何々、彌左衛門と名を變へ赦してやるとは、ア、有り難い御仁心、ぞつこんに滲み渡り、家來とは思はぬ彌左衛門様、親父様。」彌左「爰な若子勿體ない、

主が家來に何の禮。」勝助「イヤ其方があればこそ、勘當も赦りたでないか。」「赦りたが夫れほど嬉しかか。」「嬉しうなうて何とせう。」「俺も嬉しい。」「此方も。」「そちも。」「こちも。」と手を取り組み、盡きぬ主從縁の絲、袖や絞に染めぬらん。常悦猶も感じ入り、勝助「千金にも代へがたきは人の實心。」彌左「サアノ、さう思はしやるならアノ佛間で、改めてお詫事さつしやれや。また其の上に母御様の、くれぐれと云ひ置かしやつた事もあり、委しい事はアノ一聞で。」勝助「誠に夫れも老人の心休め、イザ同道。」とうち連れて、一聞へこそは入りにけれ。早燈火も眠る頃、遠寺の鐘のかうくと、稍更け渡る丑三時、奥より出づる吉六が、以前の姿引きかへて、大小立流の長上下、お竹も元の千束姫、見かはすばかりの稱權姿、千束姫「申し義興様。」義興「コリヤ、シイ聲が高い。かねて云ひ聞かせし通り、此の家の倅勝助が、隠謀企である様子、疾より知つて入り込む所、古郷を慕ひ戻りしは天の與へ、南朝へ味方せば差赦し、北朝方へ加擔せば、首討つて尊氏を亡ぼす血祭、ぬかるな千束。」と嘯き黙き忍び入らんとする一聞、障子の内より聲高く、常悦「吉六と姿をやつし入り込みし、新田義貞の弟義興、宇治の常悦見参。」と、一聞の障子押し開き、長絹に長袴、金作りの陣刀、威あつて猛き其の骨柄、義興「色もなく、傍近く進み寄り、義興、某が本名察する上は包むに及ばず、汝如きの育ち賤しき匹夫めら、謀反などは事可笑しや。名もなき軍は萬民の愁へ、尋常に首さしのべ討たる、や否や。但

し心を改め義興に仕へ、南朝の御味方申すや、サ、返答聞かん。」と、詰めかくれば、常悦「ホ、健氣なり新田殿、南朝無二の忠義臣、實に義貞の舍弟ぞかし、頼もししく。某が宿意の一條、名もなき軍に豈天下を苦しめんや、我も南朝譜代の忠臣、楠判官正成の一人正之、ハレめづらしき對面や。」と、優美の顔色、義興からくと打笑ひ、義興「ヤア手詰に至り、此の場を遁れん其の爲に、正成の一人とは、何を證據、ソレ聞かん。」と云はせも果てず、「ホ、不審尤も、我正しく夢の告げにて、一子なる事悟りし上、今又奥にて亡き母より某へ、殘し置かれし定紋の旗、彌左衛門より譲り受けたり、イザ疑ひを晴らされよ。」と、懷中より取り出す、楠家につたふる菊水の旗、折に幸ひ山風に、へんほんと翻へる、實にかんばしき橋の、氏の系譜ぞ著き、義興ハツト横手を打ち、義興「ハ、ア誤つたり誤つたり、斯く明白なる楠の正統、いかで疑心を生ずべき。今より共に心を合はせ、勢ひ微弱の吉野山、花咲く御代に翻さん。」と、誓ひは龍虎の新田楠、義兵の礎、常悦「ハ、ハ、幸ひ幸ひ、常悦が去りし頃白坂にて、思はず手に入る石堂家の輪旨、我が手にあつて益なき賜、千束殿への我が寸志。」と、渡せば取つて押し戴き、千束「忝いさりながら、我等夫婦が姿を窺し入り込みしも、常悦さまを討ち取る手筈、斯うお心が解け合ふからは、此の場の様子味方の者へ云ひ聞かせ。」義興「ホ、能くぞ心付きしぞかし、片時も早う合體の委細を知らせ、師泰が捕手を破らん、千束來れ。」

と引連れて、出で行く兩人奥の間より、「コリヤ待て吉六、お竹も待て。」と、しはがれ聲、お染が手を引き彌左衛門、力み返つて大胡坐、彌左「ヤイ吉六め、イヤサ本名は新田殿であらうが、また千束姫で御座らうが、コリヤ見よ、コ、コレ奉公人請狀の事、一つ此の吉六と申す者、コレくく、此の竹と申す女、跡の文言讀むにや及ばぬ、サ是れが此方にあるうちは、御大將でもお姫様でも、やつぱり紺屋の下人吉六、飯焚のお竹に違ひはない。主の俺が用がある、マ、こゝへ來い。コレくくお染さま、何も泣く事はござらぬぞや、ヤイ二人とも爰へ來をらぬか、暇の乞ひ捨ては天下の法度ぢや。コリヤやい俺は何にも知らずに、奥の間に寐て居たりや、此の子がござつて、コレ彌左衛門、吉六と云うたは義興様、お竹は千束姫様とやら、女夫ぢやけな、そんな上つ方に、紺屋の娘がどう女夫になられうぞ、止めたうても此のやうな形で、あなた方に詞を交すも恥かしい。したがあんまり残り多い程に、せめても一度あなたから、何となりとお詞が聞きたい、ちつとの間なりと止めてくれて、寐て居る俺を揺り起し、しくくと泣いて居さしやる。ヤコリヤ又尤も、無理ぢやない、オ、一番云はにやならぬ所ぢや、大事ないく、氣づかひさしやるなと受合つて、留めに出た此の親仁、論より證據、書いた物が物云ふわいい、書いた物が。お竹めといふ女房のある上、ナゼ此の子に疵付けた。コレマ、いかな大身れきくでも、大事のく娘御の喰逃げは、人體に似合はぬく。」と、わゝりか

けたる主思ひ、理の當然に義興千束、行くも行かれず顔見合はせ、默然として在せしが、義興「ハ、ア尤もの一言去りながら、聞かるゝ通り敵方を、取り挫ぐ性急の此の場所。」彌左「こりややい、紺屋の内中形や、小紋の形はありうちぢやが、敵方とは何の事ぢや、其の様な用を、誰が云ひ付けてわりやするぞ、最前祝言までしたぢやないか。」義興「イヤサ、夫れはさうでも、確と妻に致したと云ふではなし。」彌左「サ、妻でなければお染様はお主ぢやないか。」と、こねる紺屋の糊加減、ねまりの強き親仁なり。千束も氣の毒、千束「サア、其の奉公人に何卒お暇を。」彌左「オ、其の様にびらくと長い物著た奉公人、職人の内には合はぬ、成程暇もやらう、ガやるにしてからが十日と二十日は、お禮奉公も勤めの内ぢや、お染様の得心さしやるまではマアならぬ、出替り時まで待つて貰はう、ならんぞならんぞくすんどならんぞ。ア、餘りしやべつて腹がへつた、コリヤお竹よ、飯焚いたか。」千束「イ、エ。」彌左「是れは扱、早う焚きをれやい、出来たらソレ、茶漬一杯喰はせ。コリヤ吉六よ何うろく、ソレ味噌摺つて、汁拵へい。」と我儘も、主命なんと長袴の、裾踏みしだく膳拵へ、姫君變じてまゝ焚きや、袖の錦に褌かけ、手拭ちよつと奥様も、今更何とゆふ食の、まゝならぬ世を姫は氣の毒、「手つだをかいな。」と云ひつゝも、男の袖をすり鉢の、目と目を味噌のこい中や、お竹は胸の中くわつゝ、じやくゝ時の釜の下、火を引き椀拭く、鍋取の、「お公家様でも大名でも、喰はねばな

らぬ。」と彌左衛門、箸箱取り出し待ち居たる。常悦は諸手を組み、始終の様子伺ひる。お竹は時分と杓子とり、櫃にうつせば陰々と、湯氣立ちのほる不祥の氣、常悦きつと目を付け、常悦「ア、ラ心得ぬ、一掬の米一盞の水、釜中に熟して人間の生育す、生成の根元食類の冠たる一物、宇宙の珍寶是れに過ぎず。今器に移せる飯の湯氣、殺伐の氣を顯はすは、ム、軍將合體の今此の時、味方に取つて不祥の逆氣、我が手に於て事破れん覺えなし、扱鎌倉において秋夜が方に、凶事あるは必定、アラ不思議や訝し。」と、そなたの空、詠めやつたる叡智の明察。義興千束人々も、共に怪しむ其の折から、百二十里を二日半、飛鳥の如くに熊川三平、常悦が前に手をつかへ、三平「扱も今度の御采配、鎌倉表の總大將と、定め置かれし秋夜殿、軍用金を集めんと、出入の具足師藤兵衛と云へる者、招き寄せて酒興の上、一味の密事を明されしに、其の場は承知の體にもてなし、内へもかへらず、鎌倉の決斷所へ即刻注進したる由、鞠ヶ瀬殿を搦めんと、既に其の夜の亥の刻過ぎ、捕手の役人市垣將曹、組子引連れ込み入る所、例の鎌槍縦横無盡、寢卷の素肌に術盡きて、怯む所を折り重なり、繩めに引かるゝ決斷所、其の間に老母が即座の機轉、連判状は火鉢の中、燃え立つ煙に立ち紛れ、漸うと一方を打ち破り、此の旨注進仕らんと、夜を日に繼いで參上。」と、大息ついで訴ふれば、是れはと人々呆るゝ内、凛々然たる宇治常悦、無念骨髓に押し通り、眼は裂けて血を注ぎ、常悦「エ、口惜しや残念やな、日頃

短慮の鞠ヶ瀬秋夜、一方を預けしは一生の我が誤ち、三平は様子難波の浦の勘兵衛へ、片時も早く告げ知らせよ、急げく。』の下知より早く、飛ぶが如くに驅けり行く。彌左衛門はうろく、聲、彌左モウモウくかうなる上からは、此の子の事は千束様。』何のいなア。』「悋氣どころぢやござんせぬ、大事の殿御を二人して。』「エ、有り難い。』とお染が悦び、忙しい中で妹脊の固め。忍び立ち聞く八尾六が、身構へして躍り出で、八尾六「何もかも皆聞いた、師泰公の下知を受け、犬に入込む此の八尾六、報知は斯う。』と有り合ふ火入、もがりの竹に投げ付ければ、合圖の狼煙擧るにつれ、遠音に響く貝鐘太鼓、義興すかさず首筋掴み、ぐつと一しめ投げ付ければ、目玉飛び出て死してけり。常悦は突立ち上り「此の場は我に任せよ、義興殿には二人の女、彌左衛門諸共に、一先立ち退き笠置の古城へ、早くく、道程近きは長池玉水、此の地へ来る道筋は皆常悦が味方となし、笠置の要害堅め置きたり。軍慮を爰より見せ申さん、彌左衛門。』と詞の下、千束お染も奥の障子、明方近き笠置の城、黒の旗菊水の、旗手に指物數千の人馬、折知る花に色添ひて、晝と見まがふ提灯松明、目覺しくも又潔し。常悦庭におり立つて、何かは知らず川岸の、八重山吹をかきわけて、支度する間に義興は、二人の女彌左衛門諸共に、引きつれてこそ出でて行く。ほどもあらせず寄せくる師泰、大勢ひき具し大音上げ、師泰「此の家の内に謀反の張本、宇治の常悦隠れ居るよし、合圖によつて向うたり。最早遁

れぬ尋常に腕を廻せ。』と、呼ばはつたり。常悦騒がず悠々然と、牀几にかゝり、常悦「ヤア謀反とは存外なり、敏達天皇の後胤、楠判官正成が一子正之、常悦と假名せしは大望露顯に及ばぬ以前。今日只今憚りなく、北朝を取り挫ぐ、大元帥の目通りなるぞ。徳になつき禮儀をほどこし罷出よ。對面しととらせん。』と、勇備の詞にさしもの師泰威に恐れ、如何はせんとためらふ内、どうど響きし大石火矢、大地は裂けて燃え立つ炎、秘法の火術に師泰主従、微塵に碎けて死してけり。常悦につことうち笑ひ、常悦「年來凝つたる地雷の試み、アラ心よや悦ばしや。是れより直に笠置の城へ後詰して、北朝をとり挫ぎ、目出度き御代にひるがへさん。』と、英雄魏々たる丈夫の魂、實に楠の二葉の勇氣、逞しかりける三重有様なり。

第十一

蚩蜂集まつて大樹を動かす、義興を搦めんと、笠置の山を十重二十重、淀野木津川壺の原、甲の星を暉かし、喚き叫んで攻め登る。爰ぞ一期と義興は、太刀眞向に差し翳し、火花を散らして三重戦ひけり。智勇兼備の太刀先に、多勢もあぐんで見えたる所へ、思ひがけなく後陣より、崩れかけたる北朝勢、義興得たりと薙ぎ立つれば、右往左往に敗軍す。義興猶も追驅くるを、常悦「しばしく。』と聲を



かけ、宇治の常悅驅け來り、常世金江熊川に謀を傳へ、北朝の後陣より只一戦に打ち勝つたり。心安かれ義興殿。」善興「ハ、ア驚き入つたる貴殿の妙計、南朝ふた、び榮える吉相、頼もししく。」と悦び勇む折こそあれ、小治郎伴ふ寄浪御前、千束お染彌左衛門、金江熊川馳せ來り、寄渡南北朝和睦調ふ上からは、鞠ヶ瀬殿も相助かり、兩將に異變も有るまじ。常悅殿の情により、繪旨も手に入る千束お染も妻妾、新田楠石堂家の、契りは堅き白石噺、姉と妹が孝の道、道に道ある時津風、北は越後路、南は紀の路、津々浦々の末までも、納まり辟く君が代は、目出たかりとも中々に、申すばかりはなかりけり。

碁太平記白石噺 終

昭和三十年十一月十日印刷  
昭和三十年十一月十三日發行

(非賣品)

近代日本文學系  
第九卷

編輯者 東京市麴町區内幸町一丁目六番地 國民圖書株式會社  
右代表者 野中次郎  
印刷者 東京市本所區番場町四番地 井上源之丞  
印刷所 東京市本所區番場町四番地 凸版印刷株式會社本所分工場

發行所 東京市麴町區内幸町一丁目六番地 國民圖書株式會社  
電話銀座 二七三八三番  
振替東京 三六八八八番  
五二二九八番

Handwritten text in a vertical column on the left margin of the left page.

Handwritten text in the top right corner of the right page.

560  
9

